HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オランダ共和国の経済的興隆と17世紀のヨーロッパ経済 ： その再検討のために
Author(s)	石坂, 昭雄
Citation	北海道大學　經濟學研究, 24(4), 1-66
Issue Date	1974-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31300
Type	departmental bulletin paper
File Information	24(4)_P1-66.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

オランダ共和国の経済的興隆と17世紀のヨーロッパ経済

—— その再検討のために ——

石 坂 昭 雄

Ⅰ はじめに
Ⅱ オランダ（ライデン）毛織物工業の国内的・国際的地位
1. オランダ経済に占める比重
a. 有業人口 b. 国民所得 c. 資本蓄積
2. 生産高・生産額の国際比較
a. 南ネーデルラント（独立戦争前）
b. イギリス
c. ヴェルヴィエ＝アーヘン地域
3. ライデン都市毛織物工業の性格
Ⅲ オランダ（アムステルダム）仲継商業の勃興——その繁栄の基盤——
1. アントウェルペン市場の機能とその没落
2. バルト海—地中海貿易とオランダ——穀物・塩・新大陸の銀——
3. 西インド＝奴隷貿易
4. スウェーデンの勃興とオランダ——銅・鉄への開発投資——
Ⅳ オランダ共和国の社会構成
1. 「絶対王制」と「地主制」
2. 中産的生産者層＝産業資本の地位——産業構造との関連で——
＜補論＞ 後進資本主義の類型構成における「オランダ型」の意義
Ⅴ 結び——没落への展望——

Ⅰ はじめに

16世紀中葉から17世紀前半にかけての時期は，ヨーロッパ史上一大分水嶺をなし，この間にヨーロッパ経済の重心は決定的に転位し，地中海＝南欧に代って大西洋沿岸＝北欧諸国がヨーロッパの国際政治＝経済の主導権を握る

に到った。この過程で，比を見ぬ目覚しい経済的興隆を遂げ，約一世紀にわたって，ヨーロッパ全域——そして，アメリカやアジアにまでも——に，国際政治・経済・文化の上で，並ぶものなき勢威を振ったのがこの海のレヴィアタン，オランダ共和国であった。そして，この国は，ゆくゆくは17世紀末に強国の座から滑り落ち，世界経済の覇権をめぐる角逐の後景に退いて，主役を英仏に譲ることを余儀なくされたのであったが，それまでの間重商主義体制のイギリスも，またコルベール体制のフランス絶対王制にしても，何よりもまず，このオランダの優位に挑戦することをもってその最大の課題となしたのである。

このオランダの「彗星の如き」興隆と「流星の如き」没落の内生的・国際的諸契機，あるいは，特異な社会構成＝国家権力構造は，比較経済史的観点からしても，少なからぬ意義を帯びている。のみならず，この時期のオランダが，全ヨーロッパ文化のプールとでもいうべき地位にあっただけに，文化史的観点からも，その社会・経済的基盤の解明が強く要望されている。このオランダの経済史的意義に逸早く着目されたのは大塚久雄氏で，氏の戦前・戦後を通じての一連の比較経済史的研究の中で，オランダは常に重要な引照基準の一つとしての地位を占めて来た。[1)] しかし，戦後の量質ともに目覚しい発展を遂げた我国のヨーロッパ経済史研究の中で，オランダ経済史研究は，全体としては取残された領域となった。それは，恐らくは，次の理由によるものと思われる。第一には，戦後の強烈な問題関心が，資本主義成立の基本的過程，とりわけ各国資本主義の成立過程の特質＝型の検出に向けられ，資本主義の発展とともに所詮没落する他はなかった，曾ての商業国家の問題は，視野の外に斥けられて来た。そして，資本主義成立期の各国民経済を規定している外枠たるヨーロッパ経済（その内部での対抗と相互補完）の統一的把握もほとんど行われなかったことから，オランダ経済史研究に対する問題提起も乏しかった。[2)]

しかし，ここ10年間で我国のオランダ経済史研究における空白は，相当埋められて来ており，またオランダにおいても，最近現れた幾つかのモノグラ

フィーや通史によって，従来の研究の偏りが大幅に是正された。また最近，内外ともに，近世ヨーロッパ経済を統一的に把握，ないしは再構成せんとする気運が高まっており，概説ないし個別研究が幾つか公刊されている。

まず，共和国時代のオランダ経済史の通史としては——少くとも，オランダ人の手になるものとしては——最初のものが，オランダ経済史学界の泰斗，ファン・ディレン教授によって執筆されたお陰で，全体の展望と研究史の吸収が著しく容易となった。また，従来最も手薄であった，農業史・農村社会史の分野でも，ド・フリース Jan De Vries，ファン・デア・ワウデ A. M. van der Woude，ファーバー J. A. Faber の諸研究が次々と公刊されて，オランダの中心部のホラント，ユトレヒト，フリースラントの農業構造が明らかにされている。[3] また，我国でも，栗原福也氏のライデン毛織物工業を中心とする諸研究，上野喬氏の，スウェーデン＝オランダ国際経済史を含めた，一連の研究，佐藤弘幸氏のイギリス，オランダ毛織物工業の国際競争に関する諸研究を挙げることができる。[4]

一方，17～18世紀の国際経済については，最近，幾つかの概説が現れており，フランスでは，ピエール・ジャナンが，≪Nouvelle Clio≫叢書に，イギリスでは，ラルフ・デイヴィスが≪World Economic History≫ Series の一冊をそれぞれ執筆している。又，17世紀初頭のオランダの勃興とスペインとの関連については，ドイツのケレンベンツ H. Kellenbenz，ファン・クラーフェレン Jacob van Klaveren 両氏の研究，バルト海地方からの穀物輸出については，先に挙げたファーバー，ポーランドのボーグッカ Maria Bogucka，モンチャック Antoni Maczak のモノグラフィーが発表されている。又，時期的には，オランダの勃興に先行するが，16世紀の南ネーデルラント，とりわけ，アントウェルペンの商業的発展に関するブリュレ W. Brulez，ファン・デア・ウェー H. van der Wee 等の優れた研究を利用できる。[5]

本稿は，こうした近年のオランダ経済史ならびに国際経済史の諸成果に拠りつつ，オランダの経済的興隆の原因，ならびにそれを可能ならしめた17世紀のヨーロッパ経済の構造についての，私なりの仮説を呈示しようとする試

みである。[6] 従って，ここでは，新たな史料を追加するよりも，出来うる限り，既知のデータの再構成による多少とも大胆な推計・比較に力点が置かれている。もとより，ヨーロッパ各国について，今日まで積重ねられて来た研究成果は，多岐にわたる厖大なものであり，筆者の微力をもっては，到底吸収しうるものではないが，オランダ経済史においても，基礎的史実がかなり明らかになって来た現在，研究を前進させる上で最も強く要請されているのは，むしろ誤りをおそれずに積極的に綜合を計り，これら史実の整合的位置づけを試みることであろう。

本稿では，数多くの問題の中から，我国において最も関心の深い，そして比較経済史的視点からいっても最も重要と思われる次の三点に焦点を絞りつつ，検討を進めて行きたい。

第一は，オランダの勃興における工業生産力的基盤の問題。この点は大塚久雄氏の『近代欧州経済史序説』の構想に直接関連している。それによれば，近世世界商業戦における「隅の首石」であり，その制覇にとって必要不可欠な一つの基礎条件を形作ったものとして，工業生産力，とりわけ毛織物工業の拡充（そして，それを規定する「国民的生産力」＝国民経済の歴史的構造的特質）が挙げられる。即ち，新大陸からスペイン本国に送られて来る莫大な銀を最終的に獲得しえた国民は，他ならぬ毛織物工業という生産力的基盤に拠って立つ国民であった。オランダの目覚しい経済的エランも，その一つの柱が，南ネーデルラントの農村工業地帯から亡命してきた生産者達により接木せられた「新毛織物工業」であるものと想定される。そこで，このオランダの工業生産力的基盤を，可能な限り量・質ともに国際的に比較し，同時にその新大陸市場との関り合いをも検討することとしたい。

第二は，17世紀におけるアムステルダム仲継市場の目覚しい誕生と繁栄を可能ならしめた諸条件，とりわけヨーロッパ経済の再編成との関わりを追求し，併せて，それがどこまでアントウェルペンの遺産継承の上に成立っているかを吟味することとしたい。

第三は，オランダ共和国の社会構成の問題である。この点は，第一，第二

の問題の解答に深く関っているが，この特異な国家形態を世界史の基本的発展段階の上にどう位置づけ類型化しうるか，先取りしていうならば，ともかく，内部に一定のブルジョワ的発展を含む絶対王制の一変種であるのか否かをここで検討する。

Ⅱ　オランダ（ライデン）毛織物工業の国内的・国際的地位

オランダ共和国の経済的興隆の時期に見られる工業的発展の中心は，仲継商業に組込まれ，かつそれを補完していた種々の加工貿易工業（とりわけ，輸入毛織物の染色＝仕上・麻織物の漂白・精糖・精塩・造船・石鹸・綿布捺染）は別として，何よりも「独立工業」としての性格を具えた繊維工業，わけても，世界商業戦において戦略的地位を占める毛織物工業に求めねばならないであろう。ところで，オランダ共和国の場合，毛織物生産の大部分――少くとも8割――を占めていたのが特権都市のライデンで[1)]，ポステュムスの詳細な研究や史料編纂のお陰でデータも比較的得易い。そこで，ここでは取敢えず，このライデンを中心に作業を進めて行くこととしたい。

このライデンの毛織物工業は，フランドル毛織物工業の影響の下に誕生し，15世紀末からドイツ・ハンザの輸出ルートに乗りながら，急速にその生産を伸ばして行ったが，1540年代から原料であるイギリス羊毛の輸出制限と高騰，他方でのイギリス毛織物の競争に挟撃されて衰退し，独立戦争当時は，一介の農村都市に落ちぶれていた。このライデン毛織物工業の再生は，独立戦争で荒廃したフランドル農村工業の生産者達を迎え入れ，スペイン羊毛を用いた「新毛織物工業」nieuwe draperie や綿・麻混織のフュステイン Fustein 工業，アンゴラ山羊の毛によるグレイン Grein の如き，輸出工業を移植したことに始まる。事実，その後1660年頃までの発展は確かに目覚しいものがあり，ピークである1654年当時，人口約7万（うち繊維工業従事者37,650），総生産額961万グルデンにも上り，1640年代からは大規模なマニュファクチャーすら姿を現わす。（後出13頁，第Ⅱ―3表B参照）17世紀当時としては，これに比肩する工業都市として，フランス絹織物業の中心地リヨン Lyon（約10万）

が挙げられるが，この都市が，商業・金融の中心地として，また中部フランスの中心都市として名高かったことを考併せると，純工業都市としてこれだけの規模は，産業革命前には類を見ぬといっても過言ではあるまい。[2] この近世経済史上ユニークな位置にあるライデン都市毛織物工業の内部構造については，栗原福也氏の優れた研究によって，基本的史実は十分紹介されているが，ここでむしろ必要なのは，ライデン自身の発展の時系列的追跡よりも，その相対的地位の方であるから，ここでは，専ら，課題を，幾つかの指標によりつつこれを確定することに限定しよう。

1.　オランダ経済に占める比重（量的測定）

まず，国内における比重であるが，周知のように，オランダ経済の場合，国内の諸経済セクターが有機的に統合されて一つの国民経済を形作っていたとはいえない。だが，ともかく一つの政治的に独立した一国をなしている以上，その中における工業セクターの比重あるいは，その発展のテンポを他の諸セクターとの比較の上で量的に把握して置くことは，その経済政策に及ぼしうる影響力からいっても，またオランダの発展への寄与を測定する上でも不可欠の予備的作業であろう。(もっとも，戦略的部門あるいは主導部門とその他一般の諸部門，あるいは，国民所得における生産所得と派生的所得の区別が必要なことはいうまでもないが，質的観点を含めた綜合的考察は最後に廻すこととしたい。)以下，有業人口，国民所得，資本蓄積の三つの側面から，毛織物工業の比重を推計してみよう。

a　**有業人口**　当時の有業人口構成の正確なセンサスが得られないことはいうまでもないが，同時代人，とりわけ『政治算術家』の挙げる数字はどうであろうか。最も有名なオランダの重商主義者ピーター・ド・ラ・クール Pieter de la Court は，1660年代のホラント州の主要部門の人口を，製造業（外国市場向工業とそれに関連せる商業）65万人，漁業45万人，貿易25万人，海運5千人とし，その他農業（及び牧畜・泥炭採取）20万，軍人・役人・貴族等20万，合計240万としているが，どう見てもこの人口数は過大である上に，輸出向製造業の従事者の比重も高過ぎるように思われる。[3] そこで，不備を承

第Ⅱ—1表A　ホラントの主要都市人口

（単位：1万人）

	1514	1570	1600	1622	1630	1640	1660
ホラント州人口	22.5	41	57	67.1	—	—	83.5
都市人口	11.8	20	30	37.7	—	—	54.8
アムステルダム	1.26	2.7～3.0	5.0	10.5	12.1	—	20.0
ライデン	1.5	1.2	—	4.5	5.4	6.5	7.2
ハールレム	1.35	—	—	3.9	—	—	3.3
農村人口	10.7	±21	±27	29.5	—	—	±30.0
オランダ全人口	100	130	160	185～190			195

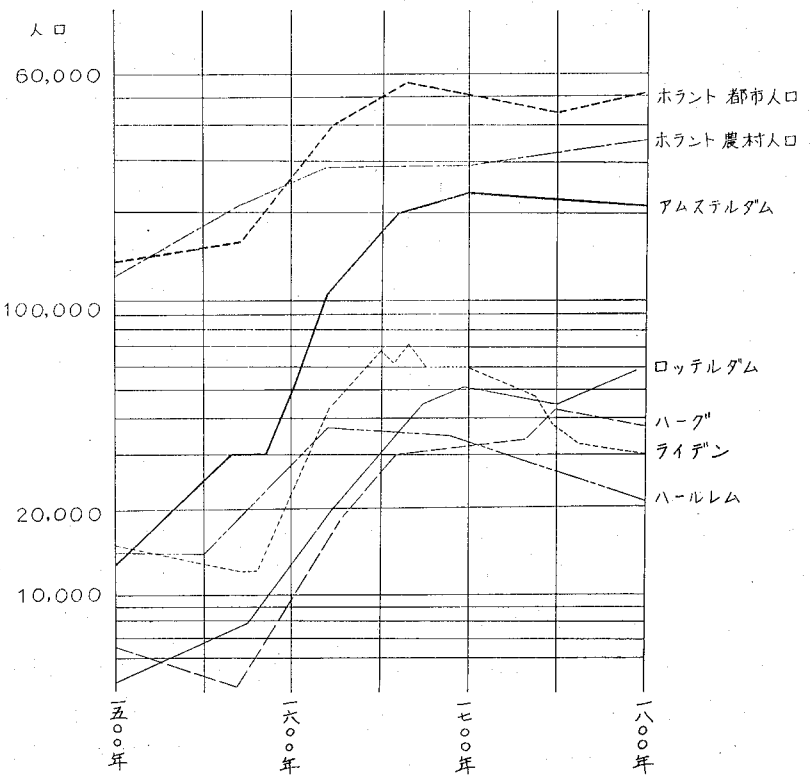
第Ⅱ—1表B　1622年ホラント州人口

都市人口	376,800
人口1万人以上11都市計	327,691
1. アムステルダム	104,932
2. ライデン	44,757
3, ハールレム	39,456
4. デルフト	22,769
5. エンクハイゼン	20,967
6. ロッテルダム	19,532
7. ドルトレヒト	18,280
8. ハーグ	15,852
9. ハウダ	14,627
10. ホールン	14,139
11. アルクマール	12,417
農村人口（425村）	294,887
総計	670,687

知で，主要都市の人口から荒っぽい推計を試みたい。まず第Ⅱ—1表Aに示された通り，オランダの総人口は1514年には約100万（うちホラント22.5万）に過ぎなかったものが1622年には185～195万に増加し，わけてもホラント州は67.0万に上っている。そして，同州の人口1万人以上の都市人口は32.7万，特権都市人口総計は37.7万（56%）を占める。この中で目を瞠るほどの人口の伸びを見せているのがアムステルダムで，独立戦争の勃発当時わずかに3万に過ぎなかったこの都市は，1622年に10.5万を数え，最盛時のアントウェ

ルペンの9～10万[4]を早くも突破した。この間，他の貿易港は停滞を続け，アムステルダムの独走が強く印象づけられる。ロッテルダムは後17世紀後半には次第にその地位を向上させ，人口も4.5～5万に増すとはいえ，この時はわずか2万で他の群小の海港と肩を並べていたに過ぎない。アムステルダムの発展は更に止る所を知らず，1660～1670年頃には，20万となった。もち論，当時のロンドンやパリはこれを大きく引離していたとはいえ，強国の政治の中心地ではない，純商業＝貿易都市としては未曾有の水準であった。他方，工業都市の方はどうか。まず，ライデンは，独立戦争当時の1.3万が1622年

第1図　ホラント州人口趨勢　1500年—1800年



に4.5万，1660年には7万へと急激な膨脹を遂げている。また，麻織物＝漂白業の中心地ハールレムは1568年の2万から，1622年に4万に増加している。（但し，これを頂点として，その後は人口が減少する）。さて，1622年の都市及び農村人口から，仲継商業＝加工貿易部門の比率を出すために，アムステルダム，ロッテルダム，ドルトレヒト，ホールン，エンクハイゼンの全人口を仲継商業に，ライデン，ハールレムとデルフト，ハウダをもって工業人口，残りの都市（首府ハーグを除く）を内陸商業に，農村人口を農漁業に割当てると，仲継商業が18万，工業が12万，内陸商業6万，農業・漁業30万という数字がえられる。ただし，オランダの農村の中にも，ザーン地域（約1.7万）をはじめ，仲継商業＝海運＝加工貿易を主たる営業としている例が多いから[5]，恐らく，仲継貿易関係と工業部門の従事者の比は2対1にも及ぶのではないか。これ以降1795年まで，全州の人口調査は行われていないので，guess work に頼らねばならないが，1660～1670年頃で都市人口55万，農村人口30万位であろう。このうち，ライデンを除き，他の工業都市の人口は停滞ないし減少を来しており，これら4大都市の人口は14万程度であるのに対しアムステルダム一市で20万，他の海港を加えると，恐らく27～28万に及ぶと思われる。以上，人口の動きから見る限り，アムステルダムの人口の伸び率はライデンを大きく引離し，ホラント州全人口の四分の一をこの一市で占めているのに対し，ライデンやハールレムは，合せてその半分以下に過ぎないことがわかる。

b　**国民所得**　国民所得（ないし，国民総生産＝支出）の推計ともなれば，有業人口以上に不正確なものにならざるを得ないが，それを承知の上で一応の目安として，毛織物工業の純生産が占める比重を算出して見よう。ライデン毛織物工業の生産額のピーク，1654年には，ラーケン織400万グルデン，グレイン300万，それ以外の毛織物200万計900万グルデンに達する。このうち羊毛をはじめとする原料費（その大部分が輸入品である）の比率を，大まかに新毛織物は⅓，ラーケン織については50%，紡糸を輸入しているグレインは⅔とすれば，純生産額は430万グルデンとなる。これに他の都市や農

村の生産額として12.5%を加えれば約500万である。ところで，17世紀末の国民所得の目安として，頻繁に引用されるのが，イギリス人のグレゴリー・キングが推計した1688年におけるイングランド，オランダ，フランス三国の人口ならびに国民所得の比較である。[6] それによると，オランダの人口は220万，所得は1750万ポンド・スターリングである。当時の換算率を1：11.36*としてこれをグルデンに直すと，2億90万グルデンとなる。キングが推計の基礎とした種々の係数が，どのようにして得られ，どこまで正確かは我々の判断しうる所ではないが，この数字はやや過大の感を抱かしめるので，別の方法で試算して見よう。1650年頃のホラントの消費税収入は，年間約700万グルデンであるが，これに，市消費税の負担，請負人の利潤を加算すれば約1000万グルデンと見て良いであろう。ところど，オランダでは，労賃に占めるこれら消費税負担はその1/6ないし1/4にも及んでいるから，ホラント全体の生活必需品に対する支出は，どんなに低目に見積っても6000万グルデンはあったと考えられる。前にも述べた通り，ホラント州は，オランダの全人口の½強を擁していたわけであるが，他州との生活水準の差を考慮に入れて，オランダの生活必需品総支出を，ホラントの倍1億2000万グルデンとして置こう。[7] さて，オランダの場合，消費税に捕捉されぬ，商業利潤・利子・地代＝家賃等の高額所得者の収入もかなり大きな比重を占めていたことは疑を容れない。今，その総額を多少低目ながら4000万グルデン[8]とおくと，オランダの1650年当時の国民所得は1億6000万グルデン程度となる。従って，毛織物工業の純生産額はその3%に過ぎない。仮に，オランダ各地に散在する麻織物工業やフュステイン織を加えたとしても，せいぜい5%に止るであろう。[9][10]

C　**資本蓄積**　この期のオランダ経済の発展を表示する他の指標として，投資ないし資本流入を挙げることができるが，遺憾ながら，間接的にもせよこの目的に利用しうる資料が殆んど得られないので，二～三の極く限られた課税台帳により比較を試みたい。以下に用いる資料は，財産額1000グルデン以上の住民に対して課せられた臨時税の階層別の統計で，ライデンについては1623年，44年，75年，アムステルダムについては，1631年，ハーグについて

は1627年と1672年の数字が判明している。(第Ⅱ—2表) まず，ライデン，アムステルダム，ハーグを比較して見よう。1623～1631年当時，アムステルダムはライデンの2倍程度の人口を擁していたに過ぎないが，課税対象財産額では3.5倍に達している。またハーグは，政府の高官，貴族の居住地で，人口1.5万ながら財産額では，ライデンを凌いでいる。次に，ライデンについて，1623，1644年，1675年の三カ年を比較すると，資産の総額においてもその分布状態においても，目立った変化は見られず，1644年には，資産総額の減少すら見せている。他方，1675年の数字をハーグと較べると，ハーグの方

第Ⅱ—2表A　ライデン市の財産階層別分布（1,000グルデン以上）

単位：グルデンf

財産額階層	課税対象人数			階層別財産分布(×1,000)		
	1623	1644	1675	1623	1644	1675
1,000— 2,999 f	576	617	824	f 920	1,007	1,319
3,000— 9,999	697	669	687	3,452	3,196	3,553
10,000—49,999	485	345	481	8,956	6,806	9,623
50,000—99,999	57	41	57	3,314	2,536	3,690
100,000 以上	14	12	22	2,235	1,955	3,260
合計	1,829	1,684	2,071	18,877	15,500	21,445

第Ⅱ—2表B　ライデン・ハーグ・アムステルダム三市の財産分布比較

階層財産	ライデン 1623		ハーグ 1627		アムステルダム 1631	
	人数	財産%	人数	財産%	人数	財産%
1,000— 2,999 f	576	4.9	132	1.1	1,157	2.8
3,000— 9,999	697	18.3	370	8.5	1,389	10.8
10,000—49,999	485	47.4	330	30.4	1,184	38.3
50,000—99,999	57	17.5	84	23.8	231	23.2
100,000 以上	14	11.9	44	36.2	99	24.9
合計	1,829	100.0	960	100.0	4,060	100.0
課税財産額計	f 18,876,600		f 22,057,000		f 62,877,950	
平均	f 14,331		f 22,900		f 15,487	

は，1627年の約2倍の資産額を示している。以上，不備を承知で，資産総額の検討を試みた限りでも，ライデンでは，大織元による巨富の形成が殆んど進行していなかったことを窺わせる。

2．生産高・生産額の国際比較

オランダ共和国の毛織物生産を，前後の時期あるいは同時代のヨーロッパ諸国の数字と比較するには，もちろん数多くの困難がつきまとう。第一に，対応する年度の生産ないし輸出の統計をうることが容易でない上に，単一の尺度に還元して表示することも困難である。たとえば，毛織物一反（stuk, pièce, cloth）といっても，国毎，地方，銘柄によって規格が区々まちまちであり，その価格も薄手のサーイと，高級の上質紡毛毛織物ラーケンでは6～7倍もの開きがある。従って単純な反数の合計は全く意味をなさない。それでは生産額はどうか。この場合，様々の銘柄について価格を入手することは不可能に近いし，又，長期をとった場合――とりわけ，かの価格革命や改鋳・貨幣的混乱の時代にあっては――固定価格 constant price に必要な指数が得にくい事情にある。また，原料となる羊毛消費量で比較するにしても，その品質の差をも考慮に入れねばならないであろう。が，ともかくも，この三つの指標を適当に組合わせるならば，大まかな国際比較は可能となろう。以下，オランダが独立戦争によってその生産力を継承したといわれている南ネーデルラントの独立戦争直前の状態，第二にオランダにとって最も手強い競争相手のイギリス，第三にライデンのラーケン織の技術を継承しつつ，これを決定的に衰退せしめた競争相手，ヴェルヴィエ＝オイペン，ならびにアーヘン周辺の農村工業地帯の三者について比較を試みることにするが，その前にオランダ側のデータをある程度整理し，若干必要な留保を付しておかねばならない。周知のように，オランダの毛織物生産の中心地は特権都市ライデンで，そこでの生産はギルド（ネーリング）別に検印を受けることになっていた。そのお陰で我々は，製品銘柄別の生産高を1583年以降毎年について知ることができる。また，生産額については，ポステュムス教授が行った試算（様々の記述史料を利用しているが）で幾つかの年度について知ることがで

きる。(第Ⅱ—3A，第Ⅱ—3B表参照) ところでオランダ国内には，アムステルダム，ハールレム，デルフト，ハウダ，ユトレヒト，カンペンなどの諸都市でも多少の毛織物生産が行われていたが，恐らくその全体を合せてもライ

第Ⅱ—3表A　ライデン毛織物生産高

単位：反

	サーイ	バーイ	ラス	ワルプ	新毛織物計	ラーケン	グレイン	フュステイン
1583	3,800	—	—	—	3,800	—	—	—
1584	23,047	—	—	—	23,047	540	—	3,033
1595	43,500	8,000	—	—	51,500	—	—	2,070
1600	35,750	9,207	2,389	—	47,386	—	—	11,311
1610	45,557	8,202	2,726	—	56,303	1,422	—	14,522
1619	53,363	17,086	6,475	6,212	83,136	1,345	—	25,079
1620	50,335	16,695	6,298	—	73,328	1,539	—	22,302
1630	48,843	14,602	10,718	—	74,163	1,780	—	32,213
1642	34,410	18,579	11,448	—	64,437	13,225	—	16,975
1654	29,874	11,312	4,396	—	45,582	21,547	30,465	8,116
1665	27,961	12,436	2,303	15,941	58,641	18,342	40,805	4,192
1670	19,493	9,687	1,200	—	30,380	16,412	54,979	2,065
1691	15,855	9,743	9	4,264	29,871	20,716	24,474	4,944

第Ⅱ—3表B　ライデン毛織物生産額

単位：1万グルデン

	1619	1630	1642	1654	1665
サーイ	192.5	163	138	96	77
バーイ	121.4	100	117	63.5	55
ラス	17.5	30	34	14	6
ワルプ	18.6	18	20	22.5	31
新毛織物小計	350.0	311	309	196	169
ラーケン	8.3	11	300	400	296
グレイン	—	11	33	300	306
毛織物計	358.3	333	642	896	771
フュステイン	44.5	57	31	15	4.5
総計	402.8	400	683	961	780.5

デンの¼～⅛程度に止ったであろう。ところで1648年以来ライデン毛織物工業への脅威として騒がれた，北ブラバント農村工業地帯（ティルビュルフ，オーステルウェイク，エイントホーヴェンなど）の生産の本格的伸びも，むしろ1650年代末あたりと思われるので，1654年当時，せいぜい2～3000反のラーケン織（未仕上）を生産していた程度であろう。一方，オランダの毛織物輸出，あるいは輸入毛織物の染色仕上＝再輸出の数字は全く把むことができない。しかし，ライデンの毛織物工業が圧倒的に外国市場に依存していたことは疑を容れない所であるから，ここでは，ライデンの生産高をもって，輸出高とおくことにしよう。

a　**南ネーデルラント**　オランダ独立戦争前の16世紀後半には，曾って殷盛を誇った中世都市ヘント（ガン），ブリュッヘ（ブリュージュ）の毛織物工業は，最早昔日の俤がなかったとはいえ，これに代ってフランドル農村に，主としてスペイン産羊毛を原料とする「新毛織物」――とりわけ，サーイ・バーイなど薄手の毛織物――工業が勃興し，アントウェルペンを通じて，南欧・新大陸に輸出され，イギリスと覇を競い合っていたことは今更繰返えすまでもないであろう。ところで，この大陸随一の農村毛織物工業地帯の生産高については，仲々手掛りが得られない。先ず羊毛消費量であるが，1560年当時，ネーデルラント（南北）全体で，スペイン産羊毛900万ポンド，イギリス産129.6万ポンドを輸入していたといわれる。この他，国産の羊毛，スコットランド，ポンメルン，オーストリアなどのドイツや東・北欧産も使用されていた。今，その半ばが薄手の新毛織物に使用されるものとし（1反当り17ポンド），残りは厚地の紡毛毛織物とすれば（一反当り60ポンド），前者が約30万反，後者8.3万反という数字が得られる[11]。だが，これは，後に挙げる色々の指標からして，やや過大と思われるので，別に主要な生産地の産出高を累計して見よう。この頃出版された，ギッチャルディーニの『全低地諸邦誌』Lodovico Guicciardini, *Descrittione di tutti i Paesi-Bassi, altrimenti detti Germania Inferiore* (Anversa, 1567)は，最も手近な史料である。この著者はアントウェルペンの税関やアントウェルペンの商人仲間からの情

報を駆使しており，かなりの事情通であったから，信を措くに足りるとはいえ，種々の史料で補正する必要があろう。まず，最大の農村工業都市ホントスホーテ Hondschoote は，年々10万反のサーイを生産していたと述べられている[12]。幸，ホントスホーテについては，輸出向製品の検印記録が残されており，それによれば，1567／68年には９万６千のピークに達していた。これに検印もれ，内需用を合せると，約10万反と見られ，ギッチャルディーニの記述と完全に一致する。このサーイは，スペイン羊毛を用いず，ネーデルラント各地や，スコットランド，ドイツなど安い羊毛を用いてはいるが，一反の規格は，そのまま後のライデンのサーイ生産に承継がれているから，この場合，直接の生産高の比較が可能である。この他，ポーペリンゲ Poperinghe は，バーイ生産の中心地であり，さらに，フランドル農村には大小さまざまの毛織物生産の中心が密集していた。そして，ブリッヘやリールの如き特権都市もその頽勢を挽回すべく，その市壁内に新毛織物工業の誘致を計った。それ故，我々はブリュレに従って，薄手の新毛織物生産を20万反と見て良いであろう。一方，紡毛毛織物 Pannos (laken) では，農村工業都市アルマンティエール Armentière が年産 2.5 万反，ニューケルケ Nieuwkerke が約１万反で有も有力であるが，この他ベレBelle (Bailleul)，メーネン Menen，アルワン Halluin などでもある程度の生産が見られ，アントウェルペン・イーペル・ブリュッヘなどの特権都市にも毛織物生産の痕跡が消えたわけではない。従って，南ネーデルラントのみで，生産７万反と考えても決して過大ではないであろう。ところで，1619年のライデンのサーイ生産の絶頂をとって見ると，ホントスホーテの約半分である。サーイ以外の「新毛織物」の合計では，約８万３千反で，ライデン以外の生産を加えても10万反程度であろう。一方，紡毛毛織物は，1619年当時ライデンは1400反を生産していたに過ぎなかった。後，1650年当時，ライデンの新毛織物生産は半減し，代って高級紡毛織ラーケンが２万反を記録するが，それでも南ネーデルラントの曾ってのこの種の生産の⅓にしかならなかったのである。以上の対比より明らかなように，独立後のオランダは，曾って南ネーデルラント毛織物工業の市場の極く

一部，約1/3程度しか引継いでいなかったのであり，しかも，この間，毛織物市場は，少くとも新毛織物に関する限り，急速に拡大しつつあったと思われる。この点は，独立戦争の戦禍とアントウェルペン仲継市場の消失によって不振を極めたホントスホーテ自身，1609年の休戦後再び繁栄を取戻し，1630年には，サーイの生産が6万反まで回復したことから見ても明らかであろう。

b　**イギリス**　オランダ独立戦争前，イギリス毛織物生産は，圧倒的に紡毛毛織物（ウルン woollen）であり，総生産の6割9万反（short cloth 換算）が輸出に向けられていた。なかでも，その7割以上が，白地のままロンドンからアントウェルペンに送られ，染色・仕上の上再輸出されたが，その付加価値は30%にも及んだ。ところで，イギリスの未仕上毛織物輸出は，アントウェルペン陥落後輸出基地を喪った上，30年戦争によるドイツ市場の荒廃と貨幣的混乱により伸び悩み，代って，ネーデルラントからの亡命生産者達によって移植された新毛織物が，輸出商品として急速に伸びて行く。ところで，イギリス毛織物については，生産統計はいうに及ばず，輸出についても全国の合計が得られるのはの1701年以降のことに属し，それまでは，ロンドンの輸出統計を断片的に入手しうるに止まる。但し，17世紀末までは，毛織物輸出におけるロンドンの地位は何といっても圧倒的であったから，趨勢ないし，オランダとの比較には当面十分であろう。第Ⅱ—4表は，イギリスの毛織物輸出額を試算し，これをオランダの通貨で表示して見たものである。（イギリスのポンド・スターリングとオランダのグルデンの換算には，種々の技術的に厄介な問題を処理しなければならないが，ここでは1：11.36*を用い

第Ⅱ—4表　イギリス毛織物輸出額推計

単位：1万グルデン

	新毛織物	スペイン織	旧毛織物	総　計
1619	312.3	—	1566.5	878.7
1640	537.2	307.0	1317.7	2163.9
1660	958.2	283.0	1324.4	564.4
1701	1826.9	234.0	1339.9	3400.8

第Ⅱ—5表　主要国毛織物生産額比較

A：単位　1万グルデン　B：単位　1万人

	1660年頃			1700年頃		
	毛織生産額 A	人口 B	A/B	毛織生産額 A	人口 B	A/B
イギリス	5,200	500	10.40	5,680	520	10.92
オランダ	1,000	195	5.12	745	200	3.73
フランス	1,665	1,900	0.87	5,850	1,900	3.07

ることにした。)それによると，ロンドン経由の新毛織物の輸出は，1619年当時でほぼライデンの生産額に拮抗しており，旧毛織物（紡毛）を加えると，ライデンの5倍に及んでいる。次の1640年には，オランダ側は，ラーケン織の急激な発展によって，生産額は50%増加しているのに対し，イギリス側は，旧毛織物輸出の落込みを，新毛織物（ウィステッド）とスペイン織がカヴァーし，全体としては，微増を見せるに止っている。然し，新毛織物の輸出は，オランダ（ライデン）の生産額を7割も上廻り，ラーケン織とほぼ同じ性格のスペイン織の輸出においてすら，ライデンの産額とほぼ拮抗している。

さて，1700/01年の毛織物輸出総額は，約300万ポンド（3400万グルデン）で，うち，ウステッド系の薄手が半ばを越えている。但し，スペイン織は，1640年の3/4に下落している。この当時，ライデン毛織物工業は，決定的に凋落しており，同じ時期について比較することは無意味であるから，ライデンの最盛期1654年の数字と一応較べて見よう。オランダ側の輸出総額は900万であるから，イギリスは，その4倍弱，仮にウルン系のみを取っても2倍強である。今，イギリス毛織物の輸出比率を，フィリス・ディーン女史に従って3/5とし，オランダの方を9/10とすれば，生産額では，イギリスはオランダの6倍に達していたことがわかる。然し，イギリスの毛織物生産は，ピューリタン革命の終熄後に目覚しい発展を辿ったと考えられるので，やや時点を溯らせて1660年をとって見よう。この時点での統計が入手できない上，革命の傷手で50年代に落込みが見られることも考えられるが，ここでは，1640年と1700年の間，毛織物輸出の伸びを一定と仮定して見ると，大体2600万グルデ

ンという数字が得られる。今，輸出比率を½とすれば，総生産は5200万グルデンであり，オランダの総生産の5倍となる。今，オランダの人口を195万，イギリス（イングランド＝ウェイルズ）を500万とすると，人口1人当りの毛織物生産では，約2倍の開きが生ずる（第Ⅱ—6表)。但し，オランダは，ある程度まで麻織物を生産・輸出していたのに対し，イギリスは，これを専ら輸入に仰いでいたことも考慮に入れねばならないが，それでもなお両国の毛織物工業の規模の較差の像を変えることにはならないであろう。[13)]

c　**ヴェルヴィエ＝アーヘン地域**　ところでライデン毛織物工業は，1640年代からはその生産の中心を，高級紡毛毛織のラーケン織に移し，イギリス製品との競合を避けたのみならず，同種のイギリス製品スペイン織に対してはむしろ優位に立ったのであったが，1650年代以降，このライデンの技術を吸収した，南ネーデルラント＝ラインラントのヴェルヴィエ Verviers，オイペン Eupen，モンシャウ Monschau，ブルトシャイト Burdscheid，ファールス Vaals といった農村工業の中心が勃興し，次第にライデンを脅かすようになった。このライデンにとっては，後門の狼とでもたとうべき農村工業地帯は，最初17世紀後半にはライデンの下請として出発したが，18世紀初頭からは，次第に染色・仕上や原料・製品の流通面でもオランダから自立して行き，ライデンを完全に衰退せしめたのみならず，18世紀後半には，大陸最大

第Ⅱ—6表　18世後半ヴェルヴィエ＝オイペン＝アーヘン地区毛織物生産高

単位：1万反

上質紡毛毛織物	ヴェルヴィエ／オーディモン	3.0～4.5
	オイペン	1.6～2.0
	モンシャウ	1.0～1.1
	その他	[2.0]
其の他	サーイ	2.2
	粗毛毛織物	0.15
	落糸織	1.5

の毛織物工業地帯となり，産業革命の中でも主導的役割を演ずる。ところで，この地帯は1769年に350～450万ポンドのスペイン羊毛を輸入し，年産８～10万反の高級厚地毛織物 drap を生産していた。(第Ⅱ—６表) 中でも最大の中心地はヴェルヴィエで，３～４，５万反を占めていた。もっとも，この地方の製品は１反当りの羊毛が35～60ポンドと，ライデンに較べて，やや少く，カシミア織 Casimire，ヴィゴーニュ Vigogne，マウー Mahout といった，厚地毛織に比して価格の安いものも含まれているので，単純に反数で比較するわけには行かない。ところで，ライデン毛織物工業の生産額のピーク1654年には，ラーケン織が2.1万反，新毛織物類6.3万反である。今，ラーケン織一反に必要な羊毛を60ポンド，新毛織物17ポンドとすれば，ライデンの羊毛消費量は233万ポンドであり，この農村工業地域の½～⅔に過ぎない。生産額の方は，この地方の製品１反当り平均113.4グルデンとすれば，907.2万～1134万で，ライデンのラーケン生産額の２～３倍に達する。この農村工業地帯は，国際競争の中で，薄手の新毛織物あるいは，粗毛紡毛織を放棄し，この高級毛織物に専門化しており，ライデン側は，この他，グレイン織や薄手の新毛織物もラーケンほどではないにしても，まだまだ重要であり，更に，二つの時点の間に約一世紀の隔りがあるから，単純に両者の生産額を比較することは控えねばならないが，ともかく，このヴェルヴィエ＝アーヘン周辺地域が，単にライデンの市場を奪ったのみではなく，18世紀を通じて，この種の毛織物の市場を二倍以上も拡張したことは——ライデンにとって重要な市場であったフランスは，コルベール体制以来失われたのみならず，逆にスダン Sedan，エルブフ Elboeuf，ルーヴィエ Louviers などの中心地が，競争相手として登場して来るにもかかわらず——ライデン毛織物工業の位置を考える上で一つの重要な要因となろう。[14)]

3．ライデン都市毛織物工業の性格

以上の極く大まかな生産高・生産額の国際比較から確認しえた限りでも，このライデンの毛織物生産が，他の競争国あるいは先行する諸地域との比で，それ程強大であったとはいい難い。にもかかわらず，オランダにおいて，こ

れだけの規模の毛織物工業が瞬く間に，一つの特権都市の内部に形成されたことは，実に驚くべきことである。即ち，15世紀以降，全ヨーロッパ的に観ても，中世都市の毛織物工業の衰退と農村毛織物工業の発展は，最早覆ることはなく，ライデン自身も，国際競争の中では，農村工業国に対して，絶えず都市工業の制約条件——生活費・労賃の高騰やギルド規制——に苦しめられていた。にもかかわらず，ライデン毛織物工業は，少くとも1640年頃までは，国内あるいは，他の農村工業地域からの人口を吸収しつつ，発展を辿り，その中からマニュファクチャーさえも産み出されて来る。

ところで，このような特異なライデン毛織物工業の形成と発展を惹き起した諸条件としては，次の二つの要因がこれまで挙げられて来た。一つは，このライデンが，フランドル農村の新毛織物工業の生産者達を迎入れ，その生産力を接木したこと，しかも，オランダでは，1531年以来農村工業が禁止されており，しかも，農村には半封建的地主制が強固であったが故に，これら南ネーデルラントの亡命者達は，止むなく都市をその本拠として再編ギルド規制に悩まされながらも，絶えずその制約を乗越えながら，アムステルダム商業資本が開拓して行く新大陸市場を基盤に，その毛織物生産を展開させえたことである。この説明は，一面では事態を正しく把えてはいるが，他の色々の要因を加えてみると決してこのライデンの発展の説明として十分ではない。

まず，農村工業（とりわけ，農村における毛織物織布業）禁止令の意義を，検討する必要がある。1531年の法令が，どこまで実効を持ちえたか，これが単なる見せかけの不況時における特権都市宥和策に過ぎなかったかどうかは別にしても，独立後のオランダにおいて，ホラントやゼーラントの如き都市の勢力の強大な諸州においては，その財政の支柱たる消費税収入を確保するために，かなり強力に実施されていたものと思われるし，それゆえに，ライデンの毛織物工業人口の急激な膨脹で住宅難が生じても，市壁外への人口溢出が阻止されていたのである。だが，1531年の農村工業禁止令は，ホラント州限りで，それ以外の諸領域には適用されえないものであった。そして，オ

ランダは，それぞれ独自の主権を持つ7つの州（領邦）の緩やかな同盟であり，農村工業禁止についての全国的措置は到底とりえなかった。これら諸州の中には，封建貴族の勢力が優勢なヘルダーラントやオーヴェルエイセル等の後進地帯，あるいはフロニゲン Groningen の如く，首都が農村全域に指定市場権 Stapelrecht を行使している場合もあると同時に，フリースラント Friesland のように，農村工業禁止が――恐らく農村住民の反対によって――実現せず，独立後，数多くの小さな市場町に種々の商工業が営まれている例も忘れてはならない。(因みに，このフリースラントは，領主制を欠き，都市と並んで農民が州議会に代表を送っていた。従って，当然，ここでは，領主裁判権は存在しなかった。)それにもかかわらず，毛織物生産者達は，敢えてライデン市を選び，あるいは，そこに踏止まったのである。[15]

第二に，南ネーデルラント（とくにフランドル）農村工業地帯からの亡命者達の落着いた先は，決してオランダ（北ネーデルラント）と限られてはいなかったことに注意しなければならない。当時のフランドルをはじめ南ネーデルラント人にとって，ホラントをはじめ北ネーデルラントは，北ドイツや中部ドイツなどの同一文化圏の一国に過ぎなかったのであり，ホントスホーテのサーイ生産者ひとつを取って見ても，ドイツ・オランダを中心にヨーロッパの各地にわたっており，17世紀末のフランス・ユグノーの亡命と並んで，全ヨーロッパ的規模での生産力伝播と文化的交流の歴史の一幕であった。まず，南ネーデルラント内では，スペイン＝ハプスブル家に属さぬ，独立の大司教領のリエージュ，ドイツでは，プロテスタント系の帝国都市たる，アーヘン，フランクフルト，ヴォルムス，アウグスブルク，シュトラースブルクあるいは北ドイツのハンザ諸都市ダンツィヒ，ブレーメン，エムデンが確認されている。また，ライン＝ヴェストファーレンの麻織物工業地帯ではヴェーゼル Wesel・ゴッホ Goch・クレーフェ Cleve，スイスのバーゼルも見落すことができない。しかし，それにも増して重要であったのは，ドイツにおける最も有力な改革派 Reformierte（カルヴィニズム）の領邦，クーア・プファルツ Kur-Pfalz で，亡命者達は，最初首都ハイデルベルク，次いで農村

都市のフランケンタール Frankenthal とライン河畔の新しい建設都市マンハイム Mannheim に，そのコロニーを形成していた。また，イギリスも，これらの亡命者を数多く受入れた国であり，ノリッヂ Norwich をはじめ，コルチェスター Colchester，メイドストン Maidstone ハンプトン Hampton サザンプトン Southampton など，主として東南部の毛織物工業都市へ移住した彼等がもたらした新毛織物がやがて農村へ拡散・定着して行ったことは周知の事実である。最後に北ネーデルラント（オランダ）では，ライデンの他，アムステルダム・ハーグ・ハールレム・デルフト・ハウダの他，ミデルビュルフ Middelburg・フリシンゲン Vlissingen・ブレダ Breda・マーストリヒト Maastricht 等の都市の名が列挙されている。こうして見るならば，オランダの特権都市ライデン以外にも移住先は数多く存在したのであり，現に，これら亡命者達は，屢々再移住を行っている。従って，これら亡命者達は，農村工業地帯に第二の故郷を見出すことも不可能ではなかったし，又，フランケンタールやマンハイムのようにギルド制のない都市では営業の自由を享受しえた。それにもかかわらず，南ネーデルラントの生産者達が，敢えてこのライデンを選び，しかも，その一部は，一旦逃れた先のイギリスのコルチェスターから転入して来たのは何故だろうか。もちろん，命からがら亡命したこれらの人々にとって，ライデン市当局が差しのべた援助は大きな魅力であったに違いないが，その後，ライデン毛織物工業は都市工業の枠内で繁栄を続け，しかも，1640年頃までは，後にライデンの恐るべき競争相手となるヴェルヴィエ＝オイペン地域の農村から徒弟を多数受入れていた。[16)]

とすると，ライデンの繁栄を支えた条件としては，次の二つを重視せねばならない。第一には，このライデンの毛織物工業が高度の技術を必要とする輸出工業――とりわけ，南欧・新大陸向け――であり，原料（羊毛・染料）の入手あるいは製品の輸出の便に，アムステルダム仲継市場に接するライデンが最も恵まれていたことである。そして，第二に，ドイツ各地に分散したフランドル農村毛織物工業の生産力は，後，18世紀後半に到ってそれぞれの地での工業的発展の酵母となったとはいえ，17世紀前半には，三十年戦争に

よる戦禍と，市場ルートの壊滅のため停滞を続けたことである。この間，ライデンのみは，ヨーロッパ各地の戦禍を逃れて亡命して来る生産者を加えてひとり繁栄を続けたのである。もちろん，都市工業として生産費の面でのハンディキャップは免れなかったにしても，染色・仕上を含めた関連諸部門の便宜や，総体として優れた技術によって，農村工業と対抗しえたのである。

ところで，ライデンにおける生産者の両極分解とマニュファクチャー形成も，ライデンに与えられた国際的諸条件の下で把え直して見る必要があろう。それは，先にも述べた通り，ライデン毛織物工業の勃興期の中心部門であり，正しく南欧・新大陸市場を征服しつつあった成長セクター，薄手の新毛織物（サーイ，バーイ，ワルプ，ラス）は，イギリスの競争に圧されて，1619年を絶頂に衰退して行く。とりわけ，最も重要なサーイは1654年には，最盛時の半分近くに落ち，バーイやラス，ワルプの伸びも，決してこれを償うことはできなかった。こうした中で，ライデン毛織物工業は，一面，イギリスとの競争での敗退と，他方で，新製品市場の開拓により，セクター転換を遂げることになる。即ち，1640年頃から，高価なラーケン織が，また1650年頃からはトルコから輸入したアンゴラ山羊糸を織った，トルコ・グレイン織が成長して行く。これらは，いずれも高級品で，フランスや地中海＝レヴァントを市場としていたが，このような高級品に傾斜して行く中で，マニュファクチャーの形成が見られたことに注意する必要があろう。即ち，生産期間も，薄手の毛織物の三倍もかかり，高価な原料と丹念な製造が要求され，しかも流行に応ずるため一度に大量の注文に応ずる必要のあったこの部門では，巨額の資本を準備せねばならず，中小の織元 drapier のよく競争しうる所ではなかったし，この生産を支配するに到った少数の大織元（レーデル reeder）達は，高価な原料の盗みやすり換えを防ぎ，製造工程を直接監視するためにも，織布をも含めた，マニュファクチャーを設立せざるを得なかったのである。そうして，このラーケンとグレインの二つの部門は，労賃コストの比重が他の毛織物工業より低い上に，高度の技術を必要とするゆえに，あのヴェルヴィエの三倍といわれる高い名目賃銀を払いながら，20年近く生き延びた

のである。[17]

最後に，17世紀初頭においてオランダが生産力的にイギリスに決して劣らぬ地位にあったことを例証するためによく引合いに出されるのが，1614年の「オルダーマン・コケインの企画」Alderman Cockayne's Project の挫折である。これは，イギリスが従来オランダの手に握られていた輸出毛織物の染色・仕上を自国に奪回せんとして，未仕上毛織物の輸出を禁止した事件で，オランダもこれに対抗して，染色・仕上済毛織物の輸入を禁止した。結局この両者の禁止合戦は，イギリスの屈服をもって終るが，それは，オランダには当時ライデンなどになお有力な毛織物工業があって，イギリス産毛織物の穴を埋めて活気を呈したにの対し，イギリスでは染色・仕上技術の未熟から，完成品を直接最終消費地なるバルト海地方やドイツに売り捌くことができず，結局輸出不振でたちまち滞貨の山ができたからであったため，とされている。然し，最近，佐藤弘幸氏の研究が明らかにしたように，この企画がオランダ側に与えた影響はもっと複雑であった。もともと，この企画の黒幕が，マーチャント・アドヴェンチャラーズの未仕上毛織物輸出独占を破らんとする，イーストランド・カンパニーの画策であったことはともかく，オランダ側も，一応の染色仕上済毛織物の輸入の禁止はともかくとして，次の抜穴を設けたのである。それは，オランダがインターローパーを通じてかなりの毛織物を輸入しており，彼等を優遇するために，kersey, stamet, bay といった新毛織物，及び毛染の毛織物をこの禁止令から除外したのである。その結果は，毛染毛織物と新毛織物のオランダへの大量流入であり，アムステルダムの染色工業が潰滅したのみならず，直接これと競合するライデンの新毛織物にも大きな打撃となって，以後次第にイギリスに圧迫されて行く。[18]

以上，本章で検討した限りで得られた中間的結論を要約して置きたい。

(1)　17世紀前半のライデン毛織物工業は独立戦争直前の南ネーデルラント，あるいは同時代のイギリスに比してその生産高において遙かに劣っている。(1640年頃イギリスと同一水準の1人当の毛織物需要を想定すると，オランダの毛織物生産はその8～9割を充しうるに過ぎなかった。)もっとも，南欧

＝新大陸向の新毛織物生産を全部輸出に向ければ，イギリスとこの種の輸出では拮抗し合うことになるとはいえ，国内消費向けに同額の輸入を必要とする。従って，オランダが，この薄手の新毛織物輸出を武器に，新大陸貿易において優位に立ち，更にそこから得られる貿易差額の銀をもって，ヨーロッパないし東インドにおけるオランダ商業資本の隆盛を築き上げた，という想定は明らかに無理がある。[19]

(2) 南ネーデルラント（フランドル）の毛織物生産者が散って行った先は，オランダのみならず，ドイツ，イギリス各地に亘っているにもかかわらず，ライデンのみが，イギリスのノリッヂと並んで大陸随一の生産地となり，都市工業という制約にもかかわらず17世紀前半にはともかくも繁栄を保っていられたのは，何よりもアムステルダム仲継市場の存在に負う所が大である。[20] また，ドイツ，フランスなどの競争地が，この時期には戦乱や宗教的対立の嵐の中で，本格的発展を圧潰されていたことも考慮せねばなるまい。

それにもかかわらず，何故，オランダ，とりわけアムステルダムが，曾ってのアントウェルペンを凌ぐ繁栄に達しえたのか。この点を17世紀前半のヨーロッパ経済再編の中で把え直して見ることにしたい。

Ⅲ　オランダ（アムステルダム）仲継商業の勃興
——その繁栄の基盤——

ところで，16世紀末から17世紀の世界商業戦の焦点が，新大陸からスペイン本国にもたらされる銀——最盛期の1581年から1630年にかけては，合計1.1万トンにも上る——に向けられていたことは今更繰返えすまでもないが，この巨額の銀がヨーロッパ各地に流れ出て行くメカニズムは，この際若干検討して見る必要があろう。先ず，この時期には，「新」大陸の白人人口は，高々50万程度であり，その工業製品需要もそれ程大きなものではなかったし，その中で毛織物の占める比重は決して圧倒的に大きいとは云い難い。その上，スペインに到着した銀の再輸出先は，結局はスペインの対外支払全体によっ

て決定されるのであり，必ずしも新大陸へ送られた輸出品の原産地とは限らない。とりわけ，スペイン王室は，本国にもたらされた銀の約4分の1を国庫に収め，剰さえ，民間人の所有する銀をも強制的に借り上げて，国家財政の穴埋に用いたが，その殆んどが，イタリア，ネーデルラント等のスペイン・ハプスブルク家の属領，あるいは各地のカトリック勢力の同盟軍への軍事援助として撒布されたり，外国の金融業者に対する元利支払に充てられていた。そして，残りの民間の手に残った銀も，スペイン本国全体の貿易収支の赤字を埋めるべく結局は対外支払いに充てられたのである。[1] 従って，この銀の帰趨は，全ヨーロッパ的な国際支払の中で考察する必要があるが，その一つの手掛りとして，アムステルダム仲継商業の興隆を考察しよう。

1. アントウェルペン市場の機能とその没落

ところで，アムステルダム仲継商業の勃興の原因として，アントウェルペンの没落，そして，アントウェルペン商人が，その資本・技術・販路を携えて，大挙移住して来たことが挙げられる。このことが，決定的に重要な要因であることは，異論の余地がないが，アムステルダムの発展は，アントウェルペンを大きく上廻り，後者にはまだ見られなかった幾つかの商業・金融・加工貿易の分野をもその手に収めているのである。そこで，対比の便宜上，アントウェルペンの性格を簡単に描写して置きたい。

アントウェルペンの勃興は，ほぼ16世紀初頭に始まり，1585年に二度と立上れぬ打撃を蒙るまでの約一世紀間，その性格も繁栄の基盤も次第に変化して行った。しかし，その間，一貫して認められることは，この市場が，常設のメッセとしての性格を色濃く保持していたことで，その取引先は，南欧（スペイン，ポルトガル，イタリア），フランス，イギリス，及び中部・西南ドイツに集中し，バルト海地方・北欧とは，ドイツ・ハンザや北ネーデルラント（オランダ）の諸港の商人を介して結ばれていたに過ぎなかった。先ず，イギリスのマーチャント・アドヴェンチャラーズが，ここを基地に未仕上毛織物を輸入し，染色・仕上の上再輸出したし，ポルトガルも，その王室の専売下に置いた東インドの香料をこの市場を通じてヨーロッパ各地に送った。南

ドイツのフッガー，ヴェルザーなどの豪商も，銅などの鉱産物をここで売却していた。そして，イタリア人はもちろんのこと，スペイン人（ブルゴスの羊毛商人やバスク人），フランス人の商人達も絶えず往来・居住していた。そして，ここは金融面でも，ヨーロッパ最大の起債市場であり，スペイン国王カール五世もここで借入れては，新大陸の銀で返済していた。但し，ここでは，地元の商人の自己計算による仲継商業が展開せず，また，全ヨーロッパの国際収支を決済する clearing house たる為替大市 Wechselmesse をなおリヨンに握られていた。

しかし，このアントウェルペン市場も，1557年のスペイン国家破産によって震憾し，イタリア人や南ドイツ人を中心とした旧来の商業＝金融勢力が大幅に後退し，1559年以降，次第に土着のネーデルラント出身の商人の能動的貿易がこれに代って行った。とりわけ，フランドルの「新毛織物」や麻織物のスペイン・ポルトガル（とその植民地）向輸出やマデイラなどの砂糖の輸入・精製が新しい経済的発展を支え，ネーデルラント人の南欧やアゾレス・マデイラ群島への進出も始っていた。一方，バルト海への進出もハンザ商人との合弁で既に試みられている。しかし，1560年代に始まる宗教的弾圧と，独立戦争の騒乱，とりわけ独立軍による海上封鎖によって，アントウェルペンの海上貿易は大きな傷手を受けた。そして，1576年のスペイン軍の掠奪，1585年の陥落とオランダによるスヘルデ河口封鎖によって，曾ってのヨーロッパ商業のメトロポリスも，海への出口を失って，一内陸都市と化し，人口も4万に落ちた。この間，多くの商人達が，宗教的迫害や経済的危機を逃れて，その資本や取引先ともどもハンブルクやケルン，そして，アムステルダム，ロッテルダム，ミデルビュルフなどに居を移した。[2)]

このアントウェルペン陥落は，独立軍の有力な拠点の喪失としてはスペインの軍事的成功であったにせよ，経済的に見れば，自らの首を締めるに等しい愚行であった。スペインやポルトガルの商人が国際市場に進出する足掛りが失われ，これに代る大仲継市場は見付らなかった。同時に，曾っては大西洋の大海運勢力であったスペインの商船隊（とりわけバスク人）は，イギリ

スやオランダの私掠船に駆逐されてしまった。こうした空白を埋め，南・西欧と北欧・バルト海の二大商業圏を統合し，金融機能をも一身に集めた仲継市場アムステルダムが，次第にその大きな姿を現わすのである。[3)]

2. バルト海—地中海貿易とオランダ——穀物・塩・新大陸の銀——

ところで，正にオランダ独立戦争の開始の辺りから，ヨーロッパ商業圏に大きな地滑りが生じていた。それは，トルコの東地中海制覇とヴェネチア・ジェノヴァ勢力の駆逐による地中海圏の分断，そして一連の食料危機の勃発である。

元来，地中海地方は，全体としては穀物をその内部で賄っており，幾つかの穀倉地帯を抱えていた。先ず，黒海沿岸の南ロシアやドナウ下流，エジプト，ギリシャ（モレア半島），そしてイタリアでは，サルディニア，シチリア，アプリア Apulia などである。だが，モレア半島とエジプトを占領したトルコは，その帝国内，とりわけ首府イスタンブールの食料確保のため穀物輸出を禁止した。一方，シチリアの人口は，16世紀後半にかけて，5割もの増加を遂げ，輸出余力を失った。スペインでも，旧カスチリャ Castilla la Vieja の如き穀作地で人口が倍加し，アンダルシアは，葡萄栽培の進展で完全な穀物輸入地帯と化した。一方，北部のナヴァラ Navarra，ポルトガルは，造船・海運・製鉄業等の工業人口を賄う食料を南フランスに頼っていたが，フランスの動乱と人口増により，他の供給地を求めねばならなくなった。こうして，1560年，65年，84，85，91，97／98，1607／08，1618／19，1630／31，1648／50と，再三の饑饉が発生し，スペイン，ポルトガル，イタリアは，バルト海地方から絶えず大量の小麦やライ麦の供給を受けねばならなかった。[4)] そして，正に急激に膨張する需要に応じて，最大の輸出国となったのが，ダンツィヒ Danzig を窓口とするポーランド，とりわけ，西プロイセンや小ポーランド（ルブリン—クラクフ間）など，ヴィスワ流域であった。そして，ドヴィナ流域を後背地とするリガ Riga，オスト・プロイセンのケーニヒスベルク Königsberg も，その輸出を急激に伸ばした。（第Ⅲ—2表）こうして，バルト海地方の穀物輸出は，17世紀前半平均で小麦6876ラスト，ライ麦

第Ⅲ—1表　バルト海小麦輸出貿易の利益

単位：ダンツィヒ・ラスト当り（銀グラム表示）

年度	ダンツィヒ輸出価格	スペイン消費者価格	運賃	其の他の*諸経費	純益	利益率（%）	対スペイン為替打歩（%）
1607	1,441.00	4,163.23	310.36	288.20	+2,123.67	+ 104.1	+46.0
1608	1,283.10	4,660.44	310.36	256.62	+2,810.36	+ 141.1	+61.0
1609	1,423.00	3,648.01	310.36	284.60	+1,630.05	+ 80.7	+57.0
1610	1,352.00	3,861.77	310.36	270.40	+1,929.01	+ 99.8	+54.0
1611	1,144.00	2,972.77	310.36	228.80	+1,289.61	+ 112.7	+52.2
1612	1,234.80	3,109.16	310.36	246.96	+1,317.04	+ 73.4	+52.4
1613	1,496.40	3,949.57	310.36	299.28	+1,843.53	+ 87.5	+50.4
1614	1,404.30	3,977.64	310.36	280.86	+1,982.05	+ 99.3	+50.9
1617	1,838.10	5,435.41	262.39	367.62	+2,967.30	+ 120.2	+55.1
1618	1,552.40	4,481.31	265.07	310.48	+2,353.36	+ 110.6	+58.0
1622	1,535.30	4,245.68	265.07	307.06	+2,138.25	+ 101.5	+10.4
1627	1,740.50	6,366.75	265.07	348.10	+4,013.08	+ 170.4	−10.8
1628	1,738.80	6,082.84	265.07	347.76	+3,731.21	+ 158.6	− 5.1
1629	1,887.80	5,565.82	265.07	377.56	+3,035.39	+ 119.9	+ 5.9
1630	3,159.00	5,232.28	265.07	630.18	+1,178.03	+ 29.0	+ 3.2
1631	2,754.00	5,425.17	265.07	550.80	+1,855.30	+ 51.9	+ 6.0
1632	1,863.00	5,386.86	265.07	372.60	+2,886.19	+ 115.4	+ 5.8
1633	1,701.00	4,221.35	265.07	340.20	+1,914.08	+ 83.0	+ 2.5
1634	1,620.00	4,178.33	265.07	324.00	+1,969.26	+ 89.1	− 0.5
1635	1,765.80	5,559.64	265.07	353.16	+3,175.61	+ 133.2	+ 1.8
1638	1,944.00	5,846.16	265.07	388.80	+3,248.29	+ 128.9	− 3.0
1639	1,863.00	4,117.69	265.07	372.60	+1,617.02	+ 64.6	− 0.1
1640	1,701.00	3,777.59	265.07	340.20	+1,471.32	+ 63.8	−10.7
1641	1,701.00	5,426.12	265.07	340.20	+3,119.85	+ 135.3	−20.3
1642	1,539.00	7,116.22	265.07	307.80	+5,004.35	+ 236.9	−38.5
1643	1,701.00	5,157.84	265.07	340.20	+2,851.57	+ 123.6	+ 4.1
1644	1,701.00	5,457.42	265.07	340.20	+3,151.15	+ 136.6	+ 4.6
1645	1,822.50	5,300.63	265.07	364.50	+2,318.47	+ 94.5	+ 1.2
1646	1,458.00	6,722.35	265.07	291.60	+4,707.68	+ 233.6	− 2.5
1647	1,620.00	10,520.42	265.07	324.00	+8,310.65	+ 376.1	− 0.3
1648	2,187.00	7,945.37	265.07	437.40	+5,055.90	+ 175.0	− 2.3
1649	2,187.00	5,983.51	265.07	437.40	+3,094.04	+ 107.9	− 4.0
1650	2,430.00	6,873.45	265.07	487.00	+3,692.38	+ 116.1	− 7.9

*　保険・関税

第Ⅲ—2表　バルト海地方のライ麦西向輸出　（ズント海峡経由分のみ）

年度	総輸出量（ラスト）	オランダ船積取分		積出港							
				ダンツィヒ		ケーニヒスベルク		リガ		其の他	
		ラスト	%	ラスト	%	ラスト	%	ラスト	%	ラスト	%
1562—1569	377,791.5	309,544.5	81.5	307,241.5	81	28,338	7.5	23,181	7	15,461.5	4.5
1574—1579	186,775.5	103,507.5	55	119,706	64	31,127	16.5	12,613	6.5	23,329.5	13
1580—1589	311,499	192,665	61.5	231,441.5	74	36,438	11.5	12,350.5	4	31,269	10.5
1590—1599	464,564.5	301,425.5	65	325,895.5	70	45,246	9.5	29,312.5	6.5	64,110.5	14
1600—1609	473,714.5	352,068.5	74	361,610.5	76	49,912.5	10.5	12,296	3	49,895.5	10.5
1610—1619	522,438.5	433,882	83	404,228	77.5	58,289	11	18,117.5	3.5	41,804	8
1620—1629	414,811.5	333,334	80	245,036.5	59	68,984.5	16	3,872	1	96,918.5	24
1630—1639[1]	315,158	236,169	75	213,123	67.5	39,391.5	12.5	15,570	5	47,073.5	15
1640—1649	578,415	403,053	70	419,299	72.5	50,446.5	8.5	19,913	3.5	88,756.5	15.5
1650—1657	207,690	138,362	66.5	103,773.5	50	22,657.5	10.5	10,738.5	5	70,521	34.5
1562—1657	395,285.8	280,401.1	76.5	273,135.5	70	430,830.5	10.5	157,964	4	633,708.5	15.5

1）1632年，1634年分を含まず。

4.5万ラストに及び，とりわけポーランドの穀物輸出総額は1492年には23.25万グルデンに過ぎなかったものが，1625～50年にかけて750万～1750万グルデンと目覚しい躍進を記している[5]。ところで，ボーグッカ女史の計算によると，消費地スペインの小麦価格は，銀重量で換算して積出地ダンツィッヒの3～4倍に上り，運賃，保険，関税を差引いても100～200%の対原価利益が見込まれた。(第Ⅲ—1表) ところで，このバルト海の穀物の南欧への輸出においてハンザを絶えず圧倒し，その4分の3を握ったのがオランダであった[6]。しかも，バルト海地方は，年々西に対して出超であり，オランダ人も，バルト海向船舶の積載量の半ばをバラスト積にすることを余儀なくされていたから，その差額は，銀地金ないし貨幣でもって埋めねばならなかったが，穀物という絶対不可欠の必需品を購入するため，スペイン側は何をおいても，あの新大陸の銀を支払ったのである。ところで，スペインでは，銀の大量流入によって，バルト海地方に比して，少くとも1620年までは絶えず50%も銀価格が下っており，銀の現送によって穀物を購入すれば，利益率は更に50%増加しえよう。そして，地中海・イベリアに穀物を搬んだオランダ船は，帰り荷として，スペイン産の羊毛，あるいは塩を東に送るか，地中海地域でチャーター船として活用された。とりわけ，塩は，唯一の東向大量商品であり，しかもバルト海地方にとって不可欠の商品であり，穀物貿易を支配する他の鍵でもあった。そこで，オランダ商人は，昔からの塩業地，フランスのブルヌーフ Bourgneuf やブルワージュ Brouage に止らず，ポルトガルのセトゥバル Setubal，スペイン南部のサンタ・マリア湾 Puerto de Santa Maria，そして，遠く，ヴェルデ岬諸島や南米ヴェネズエラのアラヤ半島 Punta de Araya までも塩を求めて航海したのである。ところで，塩の場合，ポルトガル政府による20%の輸出税や，丁度穀物と逆の形の銀の安値により，利益率は著しく低かったとはいえ，ともかくも，戦略的商品であったことには変りはない。この塩の場合もオランダ船の積取率は，平均6割に及んだ。(第Ⅲ—4表)

この南欧—バルト海という，最も利益の大きな貿易分野の組織者として活躍したのが，南欧貿易に深く経験を積み，又大胆な企業者精神に富んだ南ネ

第Ⅲ—3表　バルト海地方の小麦西向輸出　（ズント海峡経由分のみ）

年度	総輸出量（ラスト）	オランダ船積取分		積出港							
				ダンツィヒ		ケーニヒスベルク		シュテティン		その他の港	
		ラスト	%	ラスト	%	ラスト	%	ラスト	%	ラスト	%
1562—1569	33,869	23,625	70	28,338	84	2,103.5	6	1,345	4	2,082.5	6
1574—1579	19,752.5	12,649.5	64	12,501	63.5	4,060	20	403.5	2	2,788	14.5
1580—1589	36,895	21,366.5	58	23,738	64	3,566.5	9.5	2,385	6.5	7,205.5	20
1590—1599	66,017	35,922.5	54.5	32,012.5	50	4,222	6.5	9,487	14.5	20,295.5	29
1600—1609	51,526.5	34,189.5	66	26,630	51.5	4,090	8	7,825	15	12,981.5	25.5
1610—1619	61,265.5	50,489	82.5	30,141.5	50	7,006	11	7,899	13	16,269	26
1620—1629	68,214.5	56,469	82.5	30,538	44.5	9,693.5	13.5	12,268	18	17,715	24
1630—1639[1]	68,753	59,380	87	54,077.5	80	4,022	6	3,930	5.5	6,723.5	9.5
1640—1649	160,541	142,226	88	128,128	80	10,969	6.5	2,821	1.5	18,623	12
1650—1657	52,025.5	43,363	83	28,588.5	55	7,010	13	7,069	13	9,358	19
1562—1657	618,859.5	479,680	77.5	394,693	63.5	56,742.5	9	55,432.5	9	111,991.5	18.5

1)　1632年，1634年分を含まず。

第Ⅲ—4表　バルト海地方塩輸入　（ズント海峡経由分のみ）

年度	総輸入量（ラスト）	オランダ船積取分		輸出国							
				フランス		ポルトガル		オランダ[2]		其の他	
		ラスト	%	ラスト	%	ラスト	%	ラスト	%	ラスト	%
1562—1569	244,655.5	162,319.5	66	131,851.5	54	59,221.5	24.5	38,492.5	15.5	150,090	6
1574—1579	134,395	61,148.5	45	26,631.5	20	63,968	47	27,203.5	20	16,592	13
1580—1589	211,462	1,219,922.5	58	67,727.5	32	76,420	36	42,104	20	25,210.5	12
1590—1599	243,720.5	142,056	59	73,437.5	30	106,556	40	32,635	15	31,092	15
1600—1609	285,350.5	177,580.5	61	134,457	47	72,602.5	25	34,604.5	12	43,686.5	16
1610—1619	254,230	223,291.5	89	107,548	42	102,364.5	41	31,316.5	12	13,001	5
1620—1629	300,704.5	250,778.5	80	187,220.5	62.5	27,947.5	9	55,492	18.5	30,044.5	10
1630—1639[1]	180,893	135,525	70	96,370	53.5	27,343	15	42,502	23.5	14,678	8
1640—1649	278,019	221,423	80	167,283	60	47,856	17.5	50,918	18	11,962	4.5
1650—1657	134,234	89,174	67	76,257	59	22,451	16.5	21,784.5	16.5	13,741.5	10
1562—1657	2,267,664	1,585,219	61	1,068,783.5	47	606,730	27	376,052.5	16	216,098	10

1）1632年，1634年度分を含まず。

2）主としてオランダが輸入精製したもの。

ーデルラント系商人であった。旧来の船舶共有組合 reederij 組織に代わる自由な合名企業，チャーター船の活用，外国為替による支払等，新技術を持込み，又，ヨーロッパのあちこちから商品を仲継市場に集めて再輸出するだけの資本を用意しえたのは，他ならぬこうした商人達で，彼等は，スペイン，ポルトガル，イタリアなどに散らばっている同郷人を代理人としながら，南欧―イベリア貿易を営んだのである。[7)]

だが，この利益の大きな新しい貿易分野をひとりオランダのみが壟断しえたのは何故であったか。そもそも，スペインと，その同君連合下にあるポルトガルやイタリアの諸邦にとり，オランダは，トルコに匹敵する不倶戴天の敵の筈だったし，1609～21年の12年休戦の期間を除くと，海陸で現に激しい一進一退の戦闘が繰広げられていた。オランダ商人が，中立国ハンザの国旗や船籍証明書を偽造したり，借用し，スペイン・ポルトガル在住の南ネーデルラント人を名儀人にしており，スペイン，ポルトガル当局も穀物，塩の如き重要な商品の輸出入に携わるオランダ船の入港を黙認していたとはいえ，拿捕の危険は絶えず付纏っていた。そして，スペイン政府も，可能な限り中立国のハンザ諸都市（殊にハンブルク）や，自領の南ネーデルラントを優遇して，できるならばオランダを締出そうとしたのである。[8)] ところで，オランダの競争国のイギリスの場合，国内の強力な工業的＝国民経済的利害ないし，軍事的利害からして，オランダの如く全く無制限の金銀地金ないし鋳貨の輸出ないし，対敵通商が許される筈もなく，バルト海貿易では，毛織物輸出により輸入対貨を獲得しなければならなかったが，この貿易は著しい不振に苦しまねばならなかった。それでは，ドイツ・ハンザ諸都市，とりわけハンブルクはどうであろうか。ここは，全くの商業都市で，貿易政策上の制約はオランダと同様全く存在しなかったといって良い。そして，この都市も，南ネーデルラント，あるいは，ポルトガル系ユダヤ人の移住者を迎え入れて活気を呈し，事実ドイツ各地の工業製品やバルト海穀物の輸出に彼等の企業者活動の跡を認めることができる。[9)] にもかかわらず，17世紀に入ると，オランダ（アムステルダム）との開きは歴然としており，結局ハンブルクもその代理

人ともいうべき役割に甘んじなければならなかった。この差をもたらした要因として考えられるのは，次の二つである。

第一は，16世紀におけるオランダの海運業（ならびにそれを支える造船業）の発展で，1570年当時，11.6万ラストの商船隊を擁して，二位のハンザの5.5万ラスト，イギリスの4.0万ラストを大きく引離し，とりわけ，バルト海貿易では，その優位は決定的であった。オランダ船は，スペイン，イタリア船に比して小型ではあったが，穀物・木材といった嵩荷の運送では経済性を誇っていた。このバルト海貿易に携ったのは，アムステルダム，ホールン，エンクハイゼンといった都市のみではなかった。周辺の農漁村の殆んどが，船を所有し船員を提供し，時には自己計算で貿易を行っていた。オランダ商人がこれらの農漁村の商船をチャーターしえたのに反し，ハンブルクでは，中世都市的保護政策から，外国船の傭用が妨げられ，シュレースヴィッヒ＝ホルシュタインや，オスト・フリースラントなどに見られた「農民的海運業」Bäuerliche Schiffahrt を利用しえなかったのである。もっとも，16世紀の間は，オランダとドイツ・ハンザ諸都市の商船隊を構成する船舶の性能あるいは一隻当りの搭載量には殆んど差がなかったが，16世紀末のフライト船 fluitschipの登場により，オランダの海運は比肩するものなき地位に上った。武装を殆んど取除き少数の海員で操船できる上，船倉が大きく平底で吃水の浅いこの船は，穀物・木材・塩といった，単価の低い嵩荷――それだけ運賃の対原価比率の大きな――の，南欧向輸送には最も経済性が大きかった。しかも，オランダの造船所，とりわけザーンダムなど農村造船業の優れた技術による低船価と低利，あるいは豊富で熟練した海員により，オランダの運賃は，競争相手のイギリスより30～50%も安かったのである。[10] かくして，1609年の12年休戦を境に，このフライト船がこれまでのヒュルク hulk 型に代り，のみならず，大西洋や地中海でも，イタリアやスペイン，ポルトガルの旧式の巨船あるいは，バスク人，ブルターニュ人の小船を駆逐した。[11] こうして，今やオランダ船は，バルト海貿易のみならず，地中海や新大陸貿易でもチャーター船として利用されるようになった。こうした穀物輸出におけるオランダ

船の優位は，当然他の商品のスペイン・ポルトガル本国やその植民地への輸出ルートを開き，オランダ船はカディスのみならず，中南米へも直接喰込みを計ったのである。とりわけ，ポルトガルから迫害を逃れてアムステルダムに集って来た改宗ユダヤ人（マラノス Marranos）が新大陸密貿易に対して，種々のルートをもたらしたことも付加えておこう。

ところで，海運に比してその重要性は劣るが，海軍力の問題もハンザを不利にした一つの条件であった。ハンブルクの如き都市国家は強力な海軍を編成して，交戦国双方の私掠船（イギリス，オランダ，フランス，他方では，南ネーデルラントのダンケルク）を防衛することができぬため，そのスペイン，ポルトガル貿易では，絶えず拿捕の脅威に付纏われていた。それに対して，ともかく数個の領邦の連邦であったオランダは，イギリスと並ぶ海軍力をもって，自国船を防衛しえたのである。

このように着々と達成されるオランダの富強は，それだけスペインの経済的・国際的地位を低落させるものに他ならなかったから，その危機感を掻き立てずにはおかなかった。スペイン側も，決して手を拱いて傍観していたわけではない。既に1570年に，スペインは，同じカトリックであるポーランド，スウェーデン，リュベックと同盟を結んで敵側のイギリスやオランダへの禁輸を企て，また，ズント海峡にスペインの貿易事務所を設けてオランダ船による中立国ハンザの名儀借りを監視せんと狙ったが，いずれも失敗に終る。1621年，12年の休戦明けとともに再開されたオランダ独立戦争は，今や新大陸をも含めて自国の経済を支配しかねまじきオランダの日の出の勢いを，何としてでも喰止めようとするスペイン＝ポルトガルの最後の足掻きでもあった。[12)]

こうして，オランダは，敵国スペイン・ポルトガルに穀物，そして，その艦隊建造に必要な木材・麻布，ひいては火器・弾薬，あるいは銅銭鋳造のための銅までも売込んで，莫大な利益を上げた。そして，この海上貿易から得られる巨額の商業利潤こそ，強力な海軍と，オラニエ公に率いられた陸軍の傭兵隊を支える戦費の源でもあった。独立戦争当時，毛織物工業をはじめと

第Ⅲ—5表　アムステルダム—ダンツィヒ間塩貿易損益

単位：ラスト当り銀グラム

年度	アムステルダム価格	ダンツィヒ価格	運賃	其の他*の諸経費	損益	同%
1609	1.707.00	332.64	38.11	33.26	−1.445.73	−81.3
1631	1.179.72	1.620.00	46.26	162.00	+ 323.02	+16.7
1632	1.006.35	1.215.00	46.26	121.50	+ 40.89	+ 3.5
1634	788.58	891.00	46.26	89.10	− 32.94	− 3.5
1638	654.17	972.00	56.54	97.20	+ 164.09	+20.3
1640	826.77	810.00	61.68	81.00	− 159.45	−16.4
1641	797.37	810.00	71.96	81.00	− 140.33	−14.8
1643	528.60	739.00	56.06	73.90	+ 80.42	+12.3
1646	465.48	534.60	48.83	53.46	− 33.17	− 5.8
1648	467.94	534.60	41.12	53.46	− 27.92	− 4.9
平均	—	—	—	—	− 132.15	− 7.4

*　保険及び関税

第Ⅲ—6表　アムステルダム—ダンツィヒ間の銀平価の差

（ポーランド通貨・ズウォチ当り）

年度	オランダ・スタイヴェル換算率	ズウォチ当り銀グラム	
		アムステルダム	ダンツィヒ
1595	40	22.88	20.85
1613	36	19.47	17.40
1617	34	18.36	16.71
1618	32—33	17.55	16.32

第Ⅲ—7表　各国商船隊規模

（単位：ラスト）

	1570年頃	1670年頃
ドイツ	55,000	52,000
オランダ	116,000	284,000
イングランド	21,000	47,000
スコットランド	5,000	5,000
フランス	40,000	40,000

する生産力的基盤の拡充と，その新大陸への輸出を通じて銀を獲得しつつ独立戦争を戦い抜かんと提唱した重商主義者ウィルレム・ユセリンクスの熱烈な信仰とその愛国の情熱は，後にオランダが辿った運命を考え併せると，我々の胸を打たずにおかない。にもかかわらず，彼の訴えが荒野に呼ばわる者の声に終ったのも，今まで述べて来たように，仲継商業による繁栄の途が瞬く間に築かれて行ったからに他ならない。

ところで，このオランダ仲継貿易の勝利の画竜点晴は，それまでジェノヴァが握っていた国際金融市場の吸収であった。この都市は没落したアントウェルペンに代って，スペインの金融＝財政の代理人となり，その銀をヨーロッパ各地に送金し，同時にリヨンに代ってヨーロッパの為替大市の機能を果していた。しかし，1627年スペインの国家破産に捲き込まれた上，30年戦争によって南ドイツにスウェーデン軍が侵入し，その取引網が崩壊した。こうして，スペインも遂に南ネーデルラント向の銀の送金にアムステルダム金融市場を利用せざるを得なくなった。かくして，1647年，はじめてスペイン政府所有の銀がカディスからアムステルダムに積出され，以後オランダは，新大陸から送られた銀の約4分の3を自国市場に吸収したといわれる。1648年，ミュンスターの和約によって，スペインは，オランダの独立を正式に追認したのであったが，これこそ，その経済的屈服の象徴に他ならなかったのである。[13)]

3．西インド＝奴隷貿易

独立以後，新たにオランダ商業の繁栄に寄与した貿易分野として挙げられるのは，いうまでもなく，東インド貿易と西インド貿易である。この両者のうち，西インド貿易の方は常に東インド貿易の利害の犠牲にされ，折角獲得された，ブラジル（1630～1654）やニュー・ネーデルラント（1612～1664）も次々と放棄されてしまう。この点で，北アメリカ東岸や西インド諸島の植民地経営に成功し，本国に大きな工業製品市場や海運・商業，とりわけ重要な再輸出商品たるタバコ・砂糖・コーヒーなどの熱帯植民地物産をもたらした，イギリス重商主義体制との差は歴然としている。しかも，東インド貿易

自体，東インド会社の独占の下で，一握りの重役や大株主の乳牛となったにせよ，オランダの全貿易ないし経済全体の中に占める比重は著しく小さかったのである。

ところで，西インド貿易が，結局はオランダの経済政策の中で継子扱いを蒙り，本国工業の市場はみすみすイギリスやフランスに奪われて行ったことは紛れもない事実であるが，西インド貿易の問題は，他の側面をも加えて考察する必要があろう。それは，奴隷貿易の問題であり，また対ポルトガル関係が，常にオランダの西インド政策の上に影を落していたことである。

ポルトガルの王位は，1580年スペイン・ハプスブルク家の襲ぐ所となり，ここに，イベリア半島は，同君連合（実質的には，スペインの支配）の下に置かれ，当然オランダとは敵対関係に入ったのである。ところで，当時，ポルトガルは，三つの勢力圏＝植民地を海外に持っていた。第一は，東インド貿易で，マラッカやゴアなどのインド洋の拠点を押さえて，ヨーロッパ向香料輸出を独占せんと試みた。第二は，ブラジルで，ポルトガル系ユダヤ人（マラノス）が経営する砂糖プランテーションにより，17世紀前半を通じて最大の砂糖生産地であり，又，染材（ブラジル木），タバコ・棉などもヨーロッパに輸出していた。第三の西アフリカは，ポルトガルの最も古くからの植民地で，マデイラ，ヴェルデ岬諸島，プリンシーペ Principe，サン・トメ Saõ Thomé などの砂糖植民地の他，ギニア，アンゴラは，黒人奴隷貿易の拠点であった。こうして，ポルトガル人は，ブラジルのみならず，スペイン領アメリカへの奴隷供給をも壟断していたのである。

ところで，オランダ＝ポルトガル関係は，一面で激しく対立しつつも，他面で貿易・海運では，様々の形で協調し合っていたのである。まず，東インドでは，モルッカ諸島やジャワを占領したオランダは，ポルトガルの勢力を事実上東インドから駆逐し，ポルトガルのみならず，その監視をぬって営まれていたアラビヤ＝地中海ルートへの香料の流を完全に干上らせたのである。しかし，本国および，ブラジルに関する限り，ポルトガルはオランダ船をむしろ活用しており，オランダ側も，スペインよりは監視の緩やかなポルトガ

ルのルートを活用した。こうして，オランダ船は，リスボンのみならず，オポルト Opporto，アヴェイロ Aveiro，ファロ Faro を足繁く訪れ，又，セトゥバルから大量の塩を積出した。一方，ポルトガルは，ブラジル貿易のためオランダ船をチャーターしたが，これは当然オランダ商人に，ブラジルとの密貿易の機会を与え，砂糖などの植民地物産の一部がアムステルダムに流れ出る一方，オランダ人の手で麻・毛織物が輸出された。しかも，このブラジルは，ラ・プラタ La Plata 経由でペルーなどのスペイン領と密貿易を行う仲継地でもあった。

こうした友好的関係は，1621年の休戦明けと共に一変し，今やオランダは，ブラジルや西アフリカでポルトガルの勢力圏に烈しい攻撃を加えたのである。その急先鋒は同年に設立された西インド会社であり，新大陸内のスペイン＝ポルトガル領域内に植民地を獲得せんとしたのである。とりわけ，既に，密貿易を通じて接触を深め，しかもユダヤ系住民の寝返りが期待しうる宝庫ブラジルが絶好の目標となった。西インド会社は失敗を重ねた末，1630年に，ブラジル東北部のオリンダ Olinda，レシフェ Recife など砂糖の主産地を次々に征服したが，その経営を安定させるためには，黒人奴隷労働力確保の必要に迫られ，次いでアフリカ進出を開始する。オランダ人は既に1610年代からアムステルダムを中心としたギニア会社 de Guinese Compagnie あるいは，ゼーラントのギニア会社 Compagnie van Guinea が，黄金海岸に進出し，1612年には，ムレー Mourée に要塞が築かれたが，ポルトガルに圧迫され続けた。1621年に西インド会社が設立されると，この地域の貿易独占権は同社に帰したが，ギニアは，時折得られる砂金を別とすれば，象牙，胡椒といった商品が得られるに止まり，しかも胡椒は東インド産に太刀打できなかった。こうして，ブラジル征服と共に，西インド会社は奴隷貿易に積極的に乗出して行く。先ず，1637年，ポルトガルのギニアにおける最大の拠点エルミナ Saõ Jorge da Mina(Elmina) を陥れ，41年にはアキシム Axim を占領する。しかし，ギニアの黒人は虚弱でブラジルの砂糖プランテーションに不適であったから，西インド会社は1641年，アンゴラのバンツー人を求めて

ルアンダ Luanda，ベンゲラ Benguela とサン・トメ，アンノボム Annobom の両島をも占領し，ここに西インド会社は，ギニア湾の奴隷貿易圏を完全に押さえ，その黄金時代を謳歌した。かくて1636～45年の間に，ブラジルのみで2万3千人の奴隷が送られた。そして，オランダ人は，ブラジルのみならず，スペイン領，あるいは，北米やカリブ海のイギリス・フランスの砂糖植民地への奴隷供給を独占しつつ，西インド貿易の利益を事実上吸上げることができた。もっとも，この独占はそう長くは続かなかった。1647年からは，スウェーデン西インド会社（オランダ人のルイ・ド・ジェールによって設立された。）がギニアに根拠地を築いてオランダに激しい競争を挑むし，40年にブラガンザ家を戴いてスペインから分離したポルトガルは，失地回復を目指してオランダに反撃を試みた。48年まずルアンダ・ベンゲラとサン・トメ島が奪回され，ブラジルも45年以来ポルトガル系住民の反乱で荒廃し，風前の灯となった。こうした中で，西インド会社の財政は行詰り奴隷貿易の見返り商品すらアムステルダムの商人から借入れねばならなかったほどであり，軍事的攻勢をかける力は全くなかった。しかも，オランダの商業資本家の主流は，西インド会社救済に反対し，ブラジル防衛には冷淡であったことに注目しなければならない。当時，次々と建設されつつあったイギリスやフランスの熱帯植民地に奴隷を供給しつつ，その生産物の輸出貿易を牛耳ったオランダ商人達にとっては，ブラジルの領有に固執する必要はなく，そして，ポルトガルとの関係改善は，イギリスに対抗する上でも，またポルトガル本国との通商を維持して行くためにも緊急の課題であった。

こうして，ブラジルを喪失した後も，奴隷貿易を基幹とするオランダの西インド商業の優位はなお続くが，イギリスやフランスが自国植民地からのオランダ商人締出しを図って，次々と打出して来る航海条令が次第にその効目を顕すと，自国の熱帯植民地の維持を怠ったオランダは，西インド貿易におけるシェアを次第に減じて行く。そして，奴隷貿易においても，イギリス・フランスなどの割込みにより，18世紀にはオランダの地位は大きく低下するのである。[14]

4. スウェーデンの勃興とオランダ——銅・鉄への開発投資——

オランダ仲継商業勃興の他の一つの要因として特筆すべきは，スウェーデンの経済的・軍事的興隆であろう。16世紀まで，デンマークの後塵を拝していたこの北欧の後進国は，1611年グスタフ・アドリフ王の登位とともにヨーロッパの雄者にのし上り，三十年戦争ではプロテスタント軍の盟主として活躍した。そして，この後スウェーデンは dominium maris baltici を誇ることとなる。この間，相闘うデンマーク・スウェーデン両国に借款や武器を送っては両者の勢力均衡を維持し，オランダにとって生命線ともいうべきバルト海貿易の自由を護るのがオランダの伝統的政策であったが，オランダとスウェーデンとの経済的関係は，この借款を通じて一層進展して行く。それは，スウェーデンがオランダからの借款の返済に，その領土内に豊富に存在した銅をもってこれに充てたためである。この過程は，上野喬氏のオランダ・スウェーデン双方の研究を駆使した優れた研究があり，詳細はそれに譲るとして，ここでは，次の点を指摘しておくに止めたい。それは，先にも述べたスウェーデンの銅が，ルイ・ド・ジェール Louis de Geer やエリアス・トリップ Elias Trip 等の手で，アムステルダム市場に送られたが，このスウェーデンの銅は，これまでハンガリー銅を扱っていたハンブルクに代り，アムステルダムをヨーロッパ第一の銅市場の地位に押し上げたのである。更に1625年以降は東インド会社が輸入した日本産の銅がこれに付加わった。ところで，当時，銅が鉄にも増して，最も重要な国際商品であったことはいうまでもないであろう。とりわけ，スペインでは，1585年から，その国庫の窮乏を補うべく，銅貨ヴェリョン véllon を大量に鋳造していたが，1634年から56年の間，国内の銀の枯渇と財政破綻が，これに拍車をかけ，いわゆるヴェリョン・インフレーションの時代を迎える。そして，56年以降もこの奔流は弱められたとはいえ，1680年の金銀本位復帰まで止まることはなかったのである。この銅貨の鋳造のために，スペインが年々，大量の銅をスウェーデンやハンガリーから輸入に仰いだことはいうまでもない。

更に，オランダ仲継市場がスウェーデンに及ぼした影響は，粗銅の輸出に

止まらなかった。グスタフ・アドルフ王は，その富国強兵策の一環として，軍事工業や輸出工業の育成を企てたが，これを支援したのが，スウェーデン銅をアムステルダム市場で一手に扱い，その代金先払で，スウェーデンに厖大な貸付残高を持っていた，ルイ・ド・ジェール Louis de Geer やエリアス・トリップ Elias Trip で，とりわけ，ルイ・ド・ジェールは，自らスウェーデンに渡り，兵器製造所，製鉄所，真鋳製造所などの特権マニュファクチャー経営に乗出したのであり，彼の故郷に近い，南ネーデルラント南部のミューズ川流域（ワロン地方）の製鉄地帯，あるいは，アーヘン一帯の真鋳工業地帯から熟練労働力をも大量に誘致したのであった。こうして，アムステルダムは，資金輸出のみならず，技術・労働力をも仲継したのである。こうして，かの「ワロン式」製鉄法という新しいマニュファクチャー技術の精髄を採り入れたスウェーデンの製鉄＝軍事工業，あるいは真鋳工業は，豊富かつ良質の原料と燃料に恵まれて，かのグスタフ・アドルフの軍事的盛威を支える兵器――とりわけ鋳鉄製の大砲――を量産・自給しえたのみならず，17世紀中葉には，大砲や，棒鉄，真鋳，銅線をアムステルダム市場に輸出しうる程になった。そして，アムステルダムは，30年戦争のさ中，武器・弾薬の集散所として，自らもその製造に当った上，このスウェーデンやイギリス，南ネーデルラントの鉄製の大砲をスペインをも含めて敵味方に売りまくったのである。

こうした，オランダの資金や技術の輸出はスウェーデンに止らず，隣接したノルウェー（デンマーク領）やロシアにも向けられたのであり，やがて，こうした金属工業製品がバルト海貿易の流れを大きく変えて行くことになる。[15]

Ⅳ　オランダ共和国の社会構成

このように，オランダのみが，16世紀末～17世紀初頭のヨーロッパ経済再編の過程で開かれて来た経済的機会を把えることができたのは，独立以前からすでに出来上っていた。仲継商業都市の優位に負う所が大きいが，その後のアムステルダムをはじめとする仲継貿易の目覚しい発展により，オランダ

は多数の特権都市が連合し農村をもその支配下に置く特異な国家形態を築き上げるにいたった。こうして，絶対主義国家の全盛時代にあってヨーロッパの最強国の一つ，オランダは，連邦共和国をなし，ヨーロッパ封建社会の中では，スイスやハンザ諸都市と並んでユニークな社会構成を維持して行ったのである。そこで，本章においては，このオランダ共和国の性格規定のため，若干の比較史的考察を試みたい。

1.　「絶対王制」と「地主制」

周知の如く，独立後のオランダは，1795年の解体まで『オランダ連邦共和国』De Republiek der Vereenigde Nederlanden あるいは『諸州連合』De Vereenigde Provinciën と称せられていたように，もともと7つの独立の領邦の連邦，というよりは軍事＝防衛同盟だったのであり，連邦政府の権限や官僚機構も無きに等しかったのである。それにもかかわらず，オランダが一つの国家としての纏りを持ちながら機能しえたのは，絶えざる国際緊張に処するための軍事的必要と，人口のみならずその経済力からいっても飛び抜けて大きなホラント州のリーダーシップのお陰であった。しかも，各邦の権力は，それぞれの邦等族議会 Staten-Provinciaal の掌握する所であり，連邦の主権を担う連邦議会 Staten-Generaal は，その代表者のいわば国際会議にも等しかったのである。そして，邦等族議会の構成はまちまちであったが，最も強大なホラント（およびゼーラント）では，特権都市のみが議席を有しており，これに対抗する土地貴族ないし農民，教会は排除されていたのである。もっとも，このような，領邦の緩やかな連合としての性格は，独立戦争前の国制をそのまま引継いだといっても良い位であった。この地域，ネーデルラント諸邦の領邦君主権を次々と奪って行ったブルゴーニュ＝ハプスブルク家は1543年のヘルダー公領 Hertogendom Gelderland 奪取をもって，リエージュ大司教領その他二三の小邦を除き全ネーデルラント17州統一に成功し，ドイツあるいはフランスから一応切離された一つの領域がここに形成された。そして，ハプスブルク家の名代 Voogd の駐在するブリュッセルに中央政府が置かれ，各邦等族議会の代表よりなる全国議会 Staten-Generaal も招集さ

れていたとはいえ，この地域が，それぞれの領邦の寄せ集めに過ぎなかったのはいうまでもなかった。とりわけ，最も有力な邦フランドルでは，ヘント，ブリュッヘなどの特権都市が，邦等族議会を支配しつつ，領邦君主の権力強化に絶えず激しく抵抗したのであり，他の邦でも事情は多かれ少なかれ同様であったといって良いであろう。従って，諸領邦の自立性を剝奪する絶対王制はおろか，かの≪Landständische Verfassung≫固有の二元的権力の克服による領邦絶対主義の確立すら成功していない。あのフェリーペ二世の一連の強圧も，実は，こうした領邦＝等族議会の権力を破壊して絶対王制を樹立せんとする試みともいえよう。[1)]

ところで，オランダ独立戦争が，ネーデルラントの北半部の離脱＝ハプスブルク家の君主権否認の形をとったことにより，あの領邦権力の二元的構成は，逆の形で（ヨーロッパ内では唯一の例であろう）解消され，等族議会が権力を掌握した。しかも，ともかくもスペイン＝オーストリアという強大な領国の君主であり，また南ネーデルラントを中心に土地貴族＝教会という対抗勢力を擁したハプスブルク家の抑止力の最早なき新生オランダにおいて，特権都市の勢力を遮る力は蟷螂の斧にも等しかった。

ところで，大塚久雄氏が，この著しく分権的な連邦共和国をも，敢えて「絶対王制の段階，ないしは少くともそれと社会経済的構造をひとしくする歴史的段階」と規定される所以は，次の二点にある。第一は，「オランダ独立戦争＝ブルジョワ革命」説の否定である。即ち，封建的土地所有と経済外強制の体系を基礎とする社会構成が，独立によっていささかも手を触れられることなく，1795年の市民革命（バタヴィア共和国成立）まで続いたこと，第二は1531年の農村工業禁止令に始まる一連の禁圧によって折角芽生えつつあった内部成長型の小ブルジョワ経済が抑圧され，農民層分解は歪められて，都市の商人による土地集積と領主裁判権購入により，零細小作制が展開したこと，しかも，独立戦争によって，南ネーデルラントから亡命して来た中産的生産者層は，都市の枠内に閉じこめられたにせよ強力であり，オランダの仲継商業を支える基盤となったこと，そして，絶対王制の樹立を狙うオラニエ家＝

土地貴族の勢力と，この中産的生産者層・都市貴族の三巴えの格闘こそ，オランダ共和国の政治史を彩る対抗の基礎をなすこと，である。[2)]

ところで，第一の論拠であるが，オランダ共和国の体制がアンシャン・レジームの一つとして，19世紀の一連の革命の嵐の中で消え失せたことは，必ずしもオランダが絶対王制段階にあり，しかも，ブルジョワ革命の諸条件が内部に成熟して来たことを意味するものではない。18世紀の革命は，フランス革命とアメリカ独立戦争を震源地とする Atlantic Revolution ともいうべき世界史的過程の進行であり，オランダの場合には多分に外生的契機に依っているからである。

とすれば，問題は，あのオランダ農村を支配していた地主＝小作関係の性格いかんということになろう。即ち，これが，ブルジョワ的発展によって逆に補強された封建的土地所有＝半封建的土地所有なのかどうか。(共和国時代に中産的生産者層がどのような地位を占めたかは，次節で改めて論ずることにしよう。)絶対王制は，いうまでもなく，等族国家の克服の上に築かれるものであり，しかもこの絶対王制（経済外強制の体系の集中）を不可避的に進行せしめたのは，かの封建的危機（小ブルジョワ経済の発展，そして，領主制あるいは中世都市の衰退）に他ならなかった。この過程で，小ブルジョワ経済の発展の歪みによって，中産的生産者層の上層の上昇・転化によって形成された地主制が，この絶対王制を支える物質的基盤となる。地主制が，絶対王制の成立に関わりを持つのは，正しくこの展開の中においてのことである。地主＝小作関係自身は，領主権が農民の全剰余を汲み尽さぬ限り，また一定の小作料収取を可能とするだけの農業生産力の発展と農民層の分解さえあれば，必ずしも小ブルジョワ的発展に媒介されることなく形成される。(イタリアの都市国家領内の農村における折半小作制，あるいは，ドイツ・ハンザ等の大中世都市市民の農村における土地所有を想起せよ。) それでは，オランダの場合はどうであろうか。この場合も，決して小ブルジョワ経済の発達に媒介されたものとは認められない。もともと，後のオランダの中核となるホラント伯領は，中世後期（13世紀）に初めて開拓された地帯で，領主権

も，領主裁判権として機能したのみで，本領地を全くといって良い程欠いていた。従って，農民の領主に対する封建地代の負担そのものは，極く軽微であった。にもかかわらず，この地方における農民層分解，農民的貨幣経済の展開はユニークな方向を辿った。まず，低湿地で穀作が不可能であり，他方で，海と大消費地フランドルを控えたこの地方の農（漁）村は，穀物をバルト海地方に依存しつつ，自らは，酪農・畜産・泥炭採掘，あるいは北海の漁業や海運・貿易に従事したのである。こうして，幾つかの中心地が特権都市に成長し，すでに15世紀末にはその人口は，ホラント全体の半ばを越えていた。ホラントにおける地主制の形成も，このような，ホラント経済圏——R. ヘプケのいう，経済地帯 die ökonomische Landschaft ——，即ち大都市を中心として，周辺の小都市・農村を一体とする，仲継商業・海運経済の形成の一側面であった。15世紀後半の戦乱・重課，そして災害や絶えざる水との闘いに窮乏した農民は土地を喪失して行ったのに対して，これを買占めたのは仲継商業・海運によって次第に富を集積しつつあった特権都市の市民達であった。ホラントで，既に16世紀初頭には，零細小作制——ほぼ完全に貨幣地代の形をとる——が一般化したのは，このような土地集積と，仲継貿易や海運業と結びついた様々の市場向生産に負っている。[3)]

このような地主制は，オランダ独立以降も基本的に不変であったのみならず，あの目を瞠る仲継商業都市の富裕によって，一段と強化された。とりわけ，17世紀前半に造成された多数の干拓地（ポルダー）は，都市の大商人達の資金によるものであり，その資産として重要な位置を占めた。また，オランダがヨーロッパ最大の仲継市場となることによって，多くの農村もその利益に均霑して行ったのである。

このように，オランダの地主制成立の基盤は，小ブルジョワ経済の展開とその歪曲（中産的生産者の逆分解）にあったのではないことは明らかである。但し，共和国の社会構成を論ずる際には，独立以降，南ネーデルラントの遺産継承の上にオランダに移植（接木）された工業生産力とその担い手である中産的生産者層や産業資本の地位を検討して置かねばならない。

2．中産的生産者層＝産業資本家の地位――産業構造との関連で――

前節の結論に対して，当然予想される反論は次のようなものである。オランダ独立戦争の重要契機は，南ネーデルラントの農村工業地帯の中産的生産者＝初期産業資本家（カルヴィニスト）のスペイン＝カトリック絶対主義への蜂起であり，結局，彼等は北ネーデルラントに移って新国家の一翼となる。従って，あの独立戦争は未完のブルジョワ革命，そしてオランダ共和国という絶対王制樹立なのではないのか。そして，これら中産的生産者層＝産業資本は，曾っての故国のような農村工業としては展開できず，都市の中に押し込められはしたが，ともかく17世紀前半には健在で，国民経済（均斉のとれた産業構造）を形作る志向が見られたのではないのか。（「内部成長型」の産業構造を一面として含む，「混合型」として出発したのではなかったか。）

しかし，前二章で確認しておいたように，独立後のオランダが，必ずしも南ネーデルラントの工業生産力をそのままの規模で継承したわけではなかったし，仲継商業部門の急激な発展に引較べると，その意義は著しく低く評価されねばならない。ところで本節では，これら諸部門のオランダ共和国の中に占める地位を，別の面から見て行こう。まず，種々の史料を通覧して一様に感ぜられることは，建国当初の，それこそ波瀾に満ちた一時期でさえ，これらの諸部門がオランダの政治・経済に行使しえた影響力は甚だ小さいことである。17世紀後半の代表的重商主義者ピーター・ド・ラ・クールが終始，都市貴族＝仲継商業に妥協的であったのはいうまでもないが，建国期の闘士ウィルレム・ユセリンクスですら，あの都市の特権，消費税の重課に対する反対，営業の自由や保護関税の要求を正面から掲げて，かの都市貴族と対決することはできなかった。彼とても，スペインとの和平反対（徹底抗戦と南ネーデルラント解放），東インド会社の改革や西インド会社設立運動を通じて，自らの仲間達の自己主張を迂路，表明しえたに過ぎなかったのである。あのオランダの都市貴族の支配体制は，ユセリンクス等一握りの亡命者の力では動かすことのできぬ盤石の重みをもってのしかかったのである。

ところで，ユセリンクスの最も有名なパンフレットである，ブラジル植民

地建設案は，国内の諸産業の市場獲得と貿易差額の収得，そして，これによって，スペインの銀を引寄せ，戦費をも調達する雄大な構想が陳べられている。(また彼は，東インド会社の改革案においても，エチオピア，日本など東洋での毛織物新市場の開拓を叫んでいる。)とすれば，その背景には，ラーフェステインのいうように，広範な産業資本の，販路や廉価な原料を求める強い要求が現実に存在した，といえないだろうか。このユセリンクス構想を読む際には，幾つかの留保が必要であろう。第一には，ユセリンクスの生涯の志は，故国のフランドル＝ブラバントを，カトリック＝スペインの圧制から解放することにあった。それゆえ，これは，アントウェルペンの港や，フランドル＝ブラバントなどの工業生産力を基盤にして考えられるものであり，そして，もし，フランドル＝ブラバント奪回に成功せぬ時には，まだこれらのスペイン支配下に踏止まっている生産者達，あるいは，ドイツ，イギリスに離散した亡命者達を，オランダに迎入れ安住の地を提供することを狙いとしていたのである。ブラジル植民地建設は，そのための前提条件でもあった。[4)]

ところで，オランダにおける中産的生産者の一定の地歩を裏付けるものとして，カルヴィニズムをめぐる宗教的対立が挙げられる。資本主義成立史上，カルヴィニズムは中産的生産者層と強度の親和関係を見せて来たことは紛れもない事実で，南ネーデルラント農村工業地帯もその例に漏れなかった。このことは，先に述べたユセリンクスの熱烈な信仰が今日我々によく伝えてくれている。ところで，独立オランダは，スイス，スコットランド，クーア・プファルツと並んで，カルヴィニズムが一国を制覇した数少い事例に属するが，このカルヴィニズムの中で次第に力を持ち始めた予定説の厳格なる教義，そして，自律的な誓約共同体を形成せんとするカルヴィニズムの固有の志向が，都市貴族の怖畏を強め，17世紀初頭（1605～18年）のアルミニウス派とホマルス派の激突にまで展開して行く。都市貴族層は，その商人的利害から寛容（予定説の緩和）を説くアルミニウス派側に立ち，教会の国家への従属（エラストゥス主義）を主張して，厳格な教義を護り抜かんとするホマルス派と対立する。で，この宗教的対立は，スペインとの和平やオラニエ家の絶

対王制樹立を狙う動きと絡んで社会的・政治的対立にまで発展した。

ところで，厳格な教義に拠って立つホマルス派の支持母胎が果して中産的生産者層と認められるかどうか。確かにライデンなどの工業都市にその勢力が強かったことから見て両者の間にある強い相関が認められよう。だが，厳格なカルヴィニズムの浸透しうる社会層は，何も中産的生産者層に限定されてはいない。(小市民あるいは小貴族も有力な一翼である。)このことは，ジュネーヴ（カルヴィニズムの拠点）やフランスのユグノーの実例からも明らかであろう。しかも予定説を含めて，厳格な教義が，ある程度実効を持ちえたのは，それを受容れる社会層の問題もさることながら，16世紀末～17世紀初頭に，いずれの国の教団もが当面せざるを得なかった内的・あるいは対外緊張による所が大きい。スペインをリーダーとし，ジェスイットを尖兵とする組織的な反宗教改革攻勢の前に，教会側の鉄の如き統制は不可避的であり，また信徒からも受容れられたからであった。

オランダにおいてアルミニウス派が敗北しホマルス派の勝利に終った（1619年のドルトレヒト宗教会議）一つの要因は，あのスペインとの緊張関係だったのであり，それゆえ貴族や都市貴族の一部をも含めた広い層をホマルス派が握ることができたのである。他方，この勝利は，中産的生産者層の政治的・経済的解放の面では，何等の前進にもならなかったのである。[5)]

以上の検討から，次の結論を引出すことは可能であろう。このオランダ共和国は，前資本主義的社会構成の中では，独特の一類型をなしている。即ち，前期的資本とりわけ仲継商業資本が絶対王制に組込まれることなく，都市連合あるいは等族国家連合の形をとりながら自立した形態であり，逆に仲継商業都市が，周囲の農村をも政治的にも経済的にも支配する。このような国家としては，ヴェネチア，ジェノヴァなどの中世の海港都市国家があり，また，ハンブルクなど，ドイツ・ハンザ，そして，アルプス山脈の通商路を扼するスイスもこの類型に加えて良いであろう。これを，今,「仲継貿易国家」ないし「オランダ型貿易国家」の名称で一括し，本来的絶対王制と区別することとしたい。

＜補論＞　後進資本主義の類型構成における「オランダ型」

ところで，本稿の課題を若干逸脱することにはなるが，この機会を利用して，比較経済史における理念型としての「オランダ型」をめぐる問題に立入っておきたい。繰返えすまでもなく，この時代のオランダの特異な経済構造が比較経済史の上で帯びる意義に逸早く着目された大塚久雄氏は，イギリス名誉革命以降の重商主義体制との対比において，これを一つの重要な引照基準としたのみならず，単なる具体的な歴史上の一国以上の，一つの類型にまで高めたのである。しかるに，大塚氏の類型構成の素材の内容はほぼ一貫して同じであるにもかかわらず，取扱われる問題の局面ないし次元は，氏の一連の論文の中で微妙な喰違いを見せており，このことが「オランダ型」の理解をめぐって混乱や誤解を招く因にもなっている。そこで，先ず，氏の「オランダ型」を問題とする局面を，執筆の順を追って列挙すれば，次の様なものとなる。①　絶対王制の構造的停滞の一類型として。[6] ②　貿易国家の二つの型の一方として。（イギリス＝内部成長型に対する仲継貿易型[7]）③　「産業構造」（「経済構造」，「金融構造」と区別される）の三類型の一（イギリス型・モノカルチャー型・オランダ型[8]）④　後進資本主義の一類型（先進資本主義＝イギリスの内部成長型に対して，跛行構造型，国民経済欠如型＝オランダ型，低開発国型＝モノカルチャー型）として。[9] このうち，①はすでに本章第1節において取上げているので，②～④の視点についてそれぞれの類型化の有効性と限界を検討して見よう。

1．貿易国家の二類型の一つとしての「オランダ型」。ここで取上げられているのは，近世経済史上に登場した貿易国家，即ち「世界商業への参加の程度の著しい国々」なのである。この中で，代表的な二つの型は，一方が，内部成長型であり，その認識のモデルは18世紀初頭のイギリスであった。即ち，局地的市場圏を起点として次第にその分業圏を拡大しつつ，国民経済（統一的国内市場）を形成している事例であった。この場合国民経済は全体としてほぼ自給自足となるような，各産業部門間の均整のとれた社会的分業に編成され，外国貿易は，国内市場を基盤とする大量生産の剰余が放出されるか，

あるいは，金銀ないし，自給不可能な原料を獲得するために，国民的産業が見返りの輸出を行うといった部面に限定されることになる。これに対するのが，ほぼ純粋に仲継貿易型といえる同時代のオランダであった。(もっとも建国期のオランダは，大塚氏の認識では，まだ自立的国民経済を志向する一連の産業部門を内に包摂し，その意味では混合型のうちに数えられ，他方，市民革命前のイギリスは，東インド会社に代表される仲継商業資本の勢力がなお強大で，いわばこれもまた両面指向的(アンビバレント)であった。)ところで，この両者は，現実に世界商業の覇権を競った間柄であり，この類型化が，両者の歴史的運命を規定する構造的要因を解明する手段として大いに有効であることはいうまでもない。だが，この二類型は，貿易国家についての，しかも，産業構造の視点から構成したものであり，正にこのゆえに，フランス，スペイン，ポルトガルといった国々，とりわけフランスのコルベール体制の位置づけは著しく困難になろう。(外国貿易への依存の点からいえば，フランスが最も小さいであろうし，だからといってこれを内部成長型に近づけることは，イギリスとの対比からいって無意味であり，他方，スペイン，ポルトガルの場合，その仲継商業は，植民地支配を基にしてのみ成立っているのであるから，オランダと同一類型に入れることは不可能である。)このように，17～18世紀，正に資本主義の形成時代をとって見ても，同時代の主要な国々の産業構造の類型化に当っては，フランス絶対王制に典型的に見られる，これまたオランダの如き純仲継貿易型とは対極にある一類型をも設定すべきであろう。

2. 産業構造論におけるオランダ型。ここでは，資本主義の経済構造（生産関係構造）あるいは，金融構造（現実資本に対する貨幣資本の運動の構造）と区別された意味での，産業構造（生産力構造ないし社会的分業の編成＝構成）という次元で，オランダ型（仲継貿易型)，イギリス型（内部成長型＝均整のとれた国民経済類型)，モノカルチャー（植民地）型が近代史上での産業構造としてもっとも徹底した型（典型）として挙げられている。こうした構造連関自体の有効性をめぐる論議はさて措くとして，産業構造レヴェルでは，果して，この三類型でもって，資本主義的世界体制下の総ての産業構造を適

切に分類ないし位置づけることが可能かどうか。問題は，経済構造，金融構造では，資本主義的世界体制成立以降のみ取扱われているのに対し，産業構造では，モノカルチャー型（これは，資本主義成立期にすでに発生している）は別として，勝れて資本主義成立期の産業構造を主として外国貿易との関わりから問題にしたイギリス型とオランダ型のみが設定されている点にある。イギリスの名誉革命から産業革命にいたる期間に見られる産業構造が，その世界商業での華々しい躍進にも拘わらず，自給自足的性格を帯び，あの産業革命自体が農業生産力の発展に支えられた国内消費の拡大によって初めて可能となったことは繰返えすまでもないが，一旦世界の工場あるいは最大の海外投資国となったイギリスは，自ら産業構造の均整を大きく崩したのである。他方，オランダの如き仲継貿易型経済は全くその存立の余地を奪われ，オランダ自身は資本主義国として再生するため苦難の一世紀を経ねばならなかった。従って，明らかに，産業構造類型が，経済構造と連関・整合を欠くままに終っているといわねばならない。

3．後進資本主義の一類型としてのオランダ型

大塚久雄氏は最新の論稿『後進資本主義の展開過程』総説において，産業構造を基に後進資本主義の類型化を試みており，先の産業構造論と経済構造論との不整合は，「跛行構造型」という一類型が設けられることによって一面では解消している。にもかかわらず，なお，オランダ型が，今度は資本主義の一類型として残され，その特徴がもっぱら18世紀のオランダ仲継商業＝加工貿易から引出されている。（ここでは，国民経済欠如型＝オランダ型という名称に代えられているとはいえ）この場合，先ず注意しておくべきは，仲継商業＝加工貿易型の後進資本主義がそもそも成立しえないことである。今日なお，他国の経済的繁栄あるいは生産力に依拠しつつ商業的に栄える香港，あるいはシンガポールといえども，本質的にはイギリス資本主義の延長に過ぎないし，今後，ますますその例を見掛けることになる，低開発国の下請加工（先進資本主義国の発注または資本進出による）は，その本質からいえば，植民地経済（とりわけ低賃銀労働の活用）の一変型とみるべきであろう。そ

れゆえ，オランダ型後進資本主義という類型設定自体，明らかに無理であろう。(もっとも今後，加工貿易を基軸として――一応仲継商業を抜きにして――何らかの工業化を達成しうる国が出うるか否かこの点は予測できない。)

歴史におけるオランダは，国民経済的自立を欠き，又かかる産業構造のゆえに，変革の諸条件をも欠いた，一つの悲劇的没落の見本であった。そのことは，変革を可能ならしめるような産業構造構築の重要性，あるいは，過度の外国貿易依存に支えられた繁栄を待ち受けている陥穽を我々に意識させる重要な教訓となる。だが，現代の低開発国問題や日本との関連においては，この問題を別の枠組と手続で把え直す必要があろう。

V　結び――没落への展望――

これまでの叙述からもう明らかになったように，独立前には，経済的には後れた地帯であった北ネーデルラント（オランダ）が，突如，経済的興隆を遂げ，ヨーロッパ随一の大商業国家に成長しえた秘密は，17世紀初頭に一挙に開けて来た新しい仲継貿易のチャンス，とりわけバルト海地方の穀物・木材とスペインが新大陸から獲得した銀との取引を逸早く独占しえたことにある。それは，アムステルダムなどが既に支配的地位を築き上げていたバルト海穀物貿易や商船隊と，アントウェルペンから移住して来た商人達の南欧市場との繋り，資本との結合によって生れたものであった。建国期の重商主義者ユセリンクスが生涯空しく叫び続けた，国民的生産力（とりわけ毛織物工業の）拡充による貿易差額の確保（スペイン新大陸の銀奪取），という国民経済建設の構想とは正に逆に，当の敵であるスペインへの穀物，ひいては艦材・武器弾薬の輸出が，アムステルダムにスペインの銀を吸寄せて行ったのであり，ここにあの夢想だにできなかった富と繁栄が築き上げられたのである。この仲継貿易による富こそ，オランダの陸海軍の軍事力の源であり，また，借款を通じて外交を有利に進め，通商の自由――Mare Liberum――を確保しえたのも，その賜であった。こうして，1609年の12年休戦から1648年のミ

ュンスター和約までの間にオランダは文字通りの「黄金時代」De Gouden Eeuw を迎え，アムステルダムは，曾ってのアントウェルペンを大きく凌ぐヨーロッパ商業・金融のメトロポリスとなった。しかも，この間イギリスは絶対王制の末期症状，そして市民革命の勃発の中で，社会的・政治的対立，あるいは毛織物輸出不振に喘ぎ，ドイツも30年戦争の動乱によって南ドイツのみならず全域が荒廃し，その真の回復まで一世紀を費した。漸く絶対王制形成に漕ぎつけたフランスは，長年の宗教戦争の傷が癒えず，またその体制を確立するまでにフロンドの乱をはじめ数々の反抗を克服しなければならなかった。その上，国の南北から絶えずスペインの侵寇に苦しめられていたのである。この中にあってひとりオランダ海上帝国は，スペイン・ポルトガルの覇権を次々に撃破し，最大の競争相手のイギリスをも東インドや地中海で圧迫していた。

だが，このオランダを押し上げて来た繁栄の諸条件が17世紀後半に入って急激に崩れて行く時，内に生産力的基盤を持たぬオランダは何等有効な対策を立てることができず，又，その旧い体制を変革する起動力を内に欠いていたのである。

第一は，オランダ仲継貿易の大動脈で「母なる商業」moeder-commercie とさえ謳われ，オランダの船腹の半ばを従事せしめたバルト海穀物貿易の低落である。(1600／49年平均の輸出は6.58万ラスト，50／99年5.58万，1700／49，3.18万ラスト）これは，西欧の農業生産が全体として回復・向上し，1660年代から生産過剰気味とさえなったからである。フランス，スペイン，ポルトガル，イタリアなどの国々では，開墾あるいは新しい作物（米，そば，玉蜀黍）の普及や植民地からの輸入によって食料事情は好転する。また，イギリスは，あの穀物法に支えられつつ小麦輸出国に転じ，スペイン・ポルトガル市場を奪った。だが，ヨーロッパ内の食料需給に革命的影響を及ぼしたのは，17世紀末に始まる馬鈴薯の急速な普及であろう。これが大衆の主食と化すや，穀類の市場は，ますますライ麦を駆逐して小麦にその重心を移し，バルト海貿易の意義はそれだけ低下した。[1)] こうして，バルト海貿易自体，次第

に構造変化を起し，植民地物産やスウェーデンの鉄などがその重要性を急速に増して行く。だが，オランダは，こうした新しい商品では最早やイギリスやスウェーデンの競争に苦しまねばならなかったのである。

そして，1650年頃から，市民革命を達成して重商主義体制を築かんとするイギリス，一方漸く絶対王制の基礎を固めたフランス（コルベール体制）が，オランダの商業・海運覇権の奪回を目指して反撃に転じた。これらの試みが直ちに効果を顕したわけではない。だが，世界商業の重心が，南欧・植民地貿易へ転位する中で，オランダは有力な切札を持たず，イギリス・フランスの躍進を拱手傍観する他なかった。17世紀末になると，スペイン植民地の銀輸出は凋落し，他方で農牧業の発展による人口増で，漸く大衆消費財の輸出市場が拓かれて来た。そして，これに代ってブラジルの金がヨーロッパの貴金属の源泉として登場して来る。この中にあって獅子の分前を獲得したのは，薄手の毛織物をもってこの市場に割込み，またカリブ海の熱帯植民地や北米東岸の移住植民地を次々に作り上げたイギリスであった。そして，フランスも，ブルボン家のスペイン王位相続により，政治的関係は緊密となり，有利な通商関係を――少くとも，オランダに比して有利な通商条約を――取結ぶことができた。こうした中で，オランダは，麻織物の加工貿易で辛うじて新大陸市場に喰込んだに過ぎない。

こうした世界貿易構造の変貌とヨーロッパ政治情勢の新たな展開の前に，オランダの強国としての地位を辛じて繋止めたのは，国家首席ヨハン・デ・ウィットの優れた政治・外交の手腕と，トロンプ，ド・ロイテルなど名提督に率いられた海軍力であった。だが1672年の敗戦で，あの輝かしい繁栄と勢威は終止符を打たれる。それ以後，少くとも18世紀前半には，オランダの貿易量の絶対的低落は起らず，アムステルダム仲継市場は，これまでに蓄積されて来た豊富な低利資金や金融上の便宜と相俟ってなおヨーロッパ第一の仲継市場としての地位を保った。だが，この間の世界貿易の目覚しい拡大の中で，ひとりオランダのみが停滞を続け，その政治的独立さえ，イギリスの後楯のお陰で何とか護られていたに過ぎなかった。

中世末期以来，海運・商業国としてヨーロッパ経済の中に組込まれたオランダは，やがて16世紀末に新しい仲継貿易のチャンスをその手に握み，未曾有の繁栄の途を歩んだ。だが，正にこの繁栄と引換えにオランダは国民経済を欠如した経済構造をその極致まで展開させたのである。17世紀後半から，正にその帰結としての，防ぐ術のない泥沼のような衰弱の苦悶が始まる。

≪註≫

I　1）大塚氏の著作の中で，オランダに関説したものは数多いが，ここでは，特に『近代欧州経済史序説』，上，（1944年，『著作集』第2巻），とくに第1編第2章，ならびに，第6巻（「国民経済」）所収の諸論文，とりわけ「オランダ型貿易国家の生成――絶対王制の構造的停滞の一類型」を参照のこと。大塚氏の『序説』第一編の構想に，大きな影響を与えたのは，その祖国に容れられず vox clamantis に終った，悲劇の重商主義者で熱烈なカルヴィニスト，ウィルレム・ユセリンクスの新オランダ国家の経済構想であり，氏のオランダ像にもそれが看取される。なお，大塚氏にとってのオランダは，Ⅲ補論で詳述するように単なる資本主義成立期における，一極限形態に止らず，広く，国民経済欠如型（仲継貿易＝加工貿易型）の典型でもあり，国民経済的自立を欠き，また，変革の内的条件も自ら作りえない，構造的停滞の，歴史における見本でもあった。その場合，氏の念頭にあったのは，日本とりわけ，戦後日本を待ち受けている「オランダ型」の陥穽に他ならなかったのである。〔大塚久雄編『後進資本主義の展開過程』（アジア経済研究所，1974年）第1章総説 ― 後進資本主義とその諸類型 ― ，とりわけ，24頁註，28頁註の指摘を見よ。〕

2）こうした，資本主義成立の基本的過程は，具体的な一国資本主義成立＝展開を明らかにする上での第一段の作業に過ぎないのであり，いわば，資本主義成立の客観的可能性を明らかにしたに止まる。歴史家に要求される課題は，この客観的可能性が，いつ，どのようにして現実性に転化しえたか，あるいは消滅に終ったかについて，その歴史的諸条件の組合せを明確にすることであり，そのためには，生産諸力の具体的なあり方や，阻止的条件たるそれぞれの封建社会の構造と並んで，国際分業への関り方が視野に採入れなければならないであろう。この点で，イギリスと最も対蹠的で，国際的契機の最も強かったオランダの場合は，一つの Grenzfall として，絶えず参照さるべきものである。

なお，イギリス資本主義の生成期における国際的契機，とりわけ毛織物工業の国際競争とセクター転換の意義を提起した論文として船山栄一「イギリス毛織物工業と国際競争 ― 17世紀における新旧毛織物の隆替をめぐって ―」（同『イギリスにおける経済構成の転換』（未来社，1967年所収）を参照。

3）J. G. van Dillen, *Van Rijkdom en Regenten. Handboek tot de economische*

en sociale geschiedenis van Nederland tijdens de Republiek ('s-Gravenhage, 1970) ; Jan De Vries, *The Role of the Rural Sectors in the Expansion of Dutch Economy : 1500—1700* (Diss. Yale University, 1970). 同書は次の標題で公刊 *The Dutch Rural Economy in the Golden Age 1500—1700* (Yale University Press : New Haven, 1974) ; A. M. van der Woude, *Het Noorderkwartier. Een regionaal historisch onderzoek in de demografische en economische geschiedenis van westelijk Nederland van late middeleeuwen tot het begin van de negentiende eeuw* (A. A. G. Bijdragen, 16 ; Wageningen, 1972), 3 dln ; J. A. Faber, *Drie eeuwen Friesland. Economische en sociale ontwikkeligen van 1500 tot 1800* (A. A. G. Bijdragen, 17 ; Wageningen, 1972), 2 dln.

4) 栗原福也「オランダ共和国成立期のアムステルダム商業の一面——バルト海貿易について——」(『一橋論叢』,第33巻第4号, 1955年)。同「最盛期におけるライデン毛織物工業の構造変化—— Pieter de la Court, 't Welvaren der Stad Leiden の所説を中心として」(東京女子大学『論集』,第9巻第1号, 1958年)。同「近世前期オランダ毛織物業」(『社会経済史大系』Ⅳ, 1960年)。同「17世紀におけるオランダ毛織物商業」(東京女子大学『比較文化紀要』,第20巻, 1965年)。同「17世紀におけるネーデルラント共和国の都市貴族支配について」(『社会経済史学』,第32巻第4号, 1966年)。同「ネーデルラント連邦共和国」(岩波講座『世界歴史』,第15巻, 1969年)。同「世界市場アムステルダムの成立とオランダ経済の特質」(『社会経済史学』,第37巻第1号, 1971年)。上野喬『オランダ初期資本主義研究』(御茶の水書房, 1973年)。佐藤弘幸「オランダ共和国の成立と毛織物工業の展開」(『社会経済史学』,第36巻第4号, 1970年)。同「オランダ共和国における毛織物の染色・仕上業の没落 —— 『コケイン計画』との関連で——」(『一橋論叢』, 第67巻第6号, 1972年)。

5) Pierre Jeannin, *L'Europe du Nord-Ouest et du Nord aux XVIIe et XVIIIe siècles* (Nouvelle Clio, 34 ; Paris, 1969) ; Ralph Davis, *The Rise of the Atlantic Economies* (World Economic History. General editor, Charles Wilson ; London, 1973) ; H. Kellenbenz,"Spanien, die nördliche Niederlande und der skandinavisch-baltische Raum in der Weltwirtschaft und Politik um 1600", *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtchaftsgeschichte* 〔以下 V. S. W. G. と略〕 XLI (1954), 290—332 ; ders., *Unternehmerkräfte im Hamburger Portugal-und Spanienhandel* (Hamburg, 1954) ; Jacob van Klaveren, *Europäische Wirtschaftsgeschichte Spaniens im 16. und 17. Jahrhundert* (Stuttgart, 1960) ; J. A. Faber, "Het Probleem van de dalende graanaanvoer uit de Oostzeelanden in de tweede helft van de zeventiende

eeuw", *A. A. G. Bijdragen*, 9（1963）; Antoni Maczak, "Export of Grain and the Problem of National Income in the Years 1550—1650", *Acta Poloniae Historica*, 18（1968）; Maria Bogucka, "Merchants' Profit in Gdansk Trade in the First Half of the 17th Century", *Acta Poloniae Historica*, 23（1971）; do.,"Amsterdam and the Baltic in the First Half of the Seventeenth Century", *Economic History Review*, 2nd Ser., XXVI（1973）; W. Brulez, "Le Commerce International des Pays-Bas au XVIe Siècle : Essai d'Appréciation Quantitative," *Revue Belge de Philologie et d'Histoire*, XLVI（1968）; do., "The Balance of Trade of the Netherlands in the Middle of the 16 th Century" *Acta Historiae Neerlandica*, IV（1970）; H. van der Wee, *The Growth of the Antwerp Market and the European Economy*（The Hague, 1963）, 3 Vols.

6) この機会を借りて，拙著『オランダ型貿易国家の経済構造』(未来社，1971年）に，書評の労をおとり下さった，上野喬(『土地制度史学』56号）船山栄一(『経済研究』第24巻第1号），栗原福也(『社会経済史学』第39巻第2号，ならびに『歴史学研究』第398号）の各氏に心より御礼申上げると共に，そこで評者により提起された諸問題に対して，一応の私なりの結論をもってお答えしたいと思う。とりわけ，私の描いたオランダ共和国の経済構造では，毛織物工業を中心とする工業生産力の展開（社会的には，中産的生産者の一定の成長）ならびに，都市貴族と封建貴族，中産的生産者層の三巴の対抗が無視ないし，著しく低く評価されていること，第二に「オランダ型貿易国家」という理念型の有効性と意味，について疑念が表明されているが，この点については，本稿の行論において触れることにしたい。

II 1) 1642年当時，ライデンを除く主要都市の織元は111人である〔N. W. Posthumus, (ed.), *Bronnen tot de geschiedenis der Leidsche Textielnijverheid*（以下，L. T. N. と略），VII（1922），no. 462，blz.，769〕に対し，ライデンでは，1650年頃830人に上っている。〔dez., *Geschiedenis van de Leidsche Lakenindustrie*, III（'s-Gravenhage, 1939），blz. 937．以下，Posthumus, *Lakenindustrie* と略〕恐らく，ライデンの織元一人当りの生産高の方が他の群小の生産地を大きく上廻っているものと思われるが，一応ライデンのシェアを，%として置く。なお，北ブラバント農村工業地帯の毛織物生産は，17世紀中葉までは取るに足らぬものであったと考えられる。

2) Posthumus, *Lakenindustrie*, III, blz. 937；リヨンの人口は，K. F. Helleiner, "The Population of Europe from the Black Death to the Eve of the Vital Revolution", *Cambridge Economic History of Europe*, eds. E. E. Rich and C. H. Wilson, IV（1967），p. 83．因みに中世フランドルの主要な毛織物工業都市は，ヘント Gent が約4～5万，ブリュッヘ Brugge 2.9～3.6万，イーペル

Ieper 約2～4万，リールは，約4万（1556年）である。cf. H. Pirenne, *Early Democracies in the Low Countries*, Harper Torchbook ed. (New York, 1963), p. 105 ; J. A. van Houtte, *Bruges : Essai d' histoire urbaine* (Collection≪Notre Passé≫ ; Bruxelles, 1967), p. 41 ; Pirenne, *Histoire de la Belgigue*, Ⅲ (Bruxelles, 1907), p. 275.

3) Pieter de la Court, *Aanwysing der heilsame Politike Gronden en Maximen vande Republike van Hollland en West-Vriesland* (Leiden, 1669), blz. 42—44. その分析は，拙著221頁以下，ならびに上野，前掲書93～94頁以下参照。

4) J. A. van Houtte, "Anvers au XVe et XVIe siècles : Expansion et apogée", *Annales. E. S. C.*, XVI (1961), 249.

5) A. M. van der Woude, *a. w.*, I, blz. 141. tabel 3・1.

6) Gregory King, *Natural and Political Observations and Conclusions upon the State and Condition of England*, repr. in *Two Tracts by Gregory King* (Baltimore, 1936), p. 51.

7) 必要なデータは，拙著192頁を参照。

8) この4,000万グルデンという数字はオランダが完全に商業から手を引いてしまった1803年の外債受取利子の総額である。拙著155頁。

9) 毛織物の他，著名な繊維工業としては綿（フュステイン）が，はじめライデンに，後アーメルスフォールト Amersfoort で栄えていたが，その最盛期の生産高は2～3.7万反（約50～92.5万グルデン）である。麻織物工業は，ハールレムで，1640年頃4000台の織機を擁していたから，紡績・準備を含めても，その純生産額は，100万グルデン程度である。この他，北ブラバントやオーヴェルエイセルのトゥウェンテにも麻織物工業が農村工業として，命脈を保っているが，18世紀中葉で，トゥウェンテで織機約2000台，北ブラバントの中心地ヘルモントとエイントホーヴェンでも19世紀初頭に，約15,000反（価格48.8万グルデン）に過ぎない。S.C. Regtdoorzee Greup-Roldanus, *Geschiedenis der Haarlemmer Bleekerijen* ('s-Gravenhage, 1936), blz. 27 ; B. H. Slicher van Bath, *Een samenleving onder spanning* (Assen, 1957), blz. 206 : 拙著306頁。単価，織機当り生産高，原料費の係数は，Faipoult, *Mémoire statistique du département de l' Escaut*, An XIII (1805), reimprimé : *Oostvlaams verbond van de Kringen voor geschiedenis*, Documeuten nr. 3 (Gent 1960), pp. 165～166 による。

10) なお，他の諸セクターの純収益に関する数字を挙げて置くと，東インド会社の年々の輸出額（貴金属を含む）が約500万グルデン，資本金が642万で，1602～19年の平均配当は24%である。しかし，ユセリンクスによると，東インド＝アジア貿易の東インド会社による独占体制を打破すれば，純益で1000万グルデンをうるこ

とも可能であるとされた。大塚久雄『株式会社発生史論』(著作集第1巻) 384頁，及び「ウィルレム・ウセリンクスの眼に映じた東インド貿易」(同，第3巻)247頁。また，鰊漁業の水揚（最盛時700隻）は約587万カロルス・グルデン（816.6万グルデン）である。J. G. van Dillen, *Van Rijkdom en regenten*, blz. 245.

11) Brulez, "The Balance of Trade", p. 40.

12) Guiciardini, *op. cit.*, pp. 237, 242 : E. Coornaert, *Un Centre industriel d'autrefois : La draperie-sayetterie d'Hondschoote (XVIe—XVIIIe siècles)*, Paris 1930, p. 494〔これは，E. H. De Sagher, (ed.), *Recueil de documents relatifs à l'histoire de l'industrie drapière en Flandre*, 2e Partie, t. 2, Bruxelles 1961, pp. 479 ff. にも収録〕, Nieuwkerke は H. van der Wee, *op. cit.*, I, pp. 531—531及び*Recueil*, III, pp. 210—211.

13) 船山，前掲書33頁，Brulez, *art. cit.*, p. 42.

14) 拙稿「ヴェルヴィエ毛織物工業の展開——ヨーロッパ大陸産業革命の一基盤——」(大野英二・住谷一彦・諸田実編『ドイツ資本主義の史的構造』, 有斐閣, 1972) ならびに，P. Lebrun, "Croissance et industrialisation ; L'experience de l'industrie drapière verviétoise 1750—1850", *Première Conférence Internationale d'Histoire éconmique. Stockholm 1960, Communication* (Paris-La Haye, 1960), pp. 530—561.

15) Jan De Vries, *op. cit.*, chap. V. ; J. A. Faber, *Drie eeuwen Friesland*, hfs. 5.

16) E. Gothein, *Wirtschaftsgeschichte des Schwarzwaldes und der angrenzenden Landschaften* (Straßburg, 1892), S. 675—685 ; Coornaert, *op. cit.*, pp. 40～41 ; W. Bodmer, *Der Einfluß der Refugianteneinwanderung von 1500—1700 auf die schweizerische Wirchaft* (Beiheft zur *Zeitschrift für Schweizeriche Geschichte*, Heft 3 : Zürich, 1946), 70 f. ; N. W. Posthumus, "De industrieele concurrentie tusschen Noord-en Zuidnederlandsche nijverheidscentra in de XVIIe en XVIIIe eeuw", *Economisch-Historische Herdrukken* ('s-Gravenhage, 1964), blz. 111～112.

17) 栗原「近世前期オランダ毛織物業」参照。

18) 佐藤「オランダ共和国における毛織物の染色・仕上業の没落」

19) オランダの毛織物工業の場合，イギリスと異って原毛の殆んどを輸入に仰いでおり，外貨手取は，輸出額の½であることをも考慮せよ。

なお，佐藤弘幸氏は，大塚久雄氏の「仲継貿易型」と「内部成長型」という産業構造の類型的把握は，オランダの没落の必然性を導き出しえても，その生成を説明しうるものではないと批判しておられるが(「オランダ共和国の成立と毛織物工業の展開」26頁)，たとえ，スペイン羊毛を用いた高級紡毛毛織でオランダが国

際競争力を有したとしても，あのオランダ仲継商業の隆盛を説明しうるものではないであろう。

20) なお，ライデン毛織物工業の原型たるフランドル，とりわけホントスホーテの毛織物工業は，輸出工業としての性格が決定的に強く，農村工業でありながら一面では，ギルド規制を志向しており，都市工業との関係は絶えず流動的であった。Coornaert, *op. cit.*, pp. 120—121.

Ⅲ 1) Jaime Vincens Vives, *An Economic History of Spain* (Princeton, 1969), pp. 323—324 ; J. van Klaveren, *a. a. O.*, S. 154 f. ; R. Davis, *op. cit.*, p. 52 et passim,

2) H. van der Wee, *op. cit.* ; J. A. Goris, *Étude sur les colonies marchandes méridionales* (Louvain, 1925 ;)E. Coornaert, *Les Franç, ais et le commerce international à Anvers* (Paris, 1961).

3) J. van Klaveren, *a. a. O.*, S. 80. ブルターニュの海運業の没落は，竹岡敬温『近代フランス物価史序説』(創文社，1974年)，276頁。オランダ船は，フランスの穀物のスペインへの輸出すら支配するにいたった。

4) J. H. Parry, "Transport and Trade Routes", *Cambridge Economic History*, IV, pp. 158—159 ; F. Braudel, *Méditerrannée et le monde méditerraneen à l' époque de Philippe II*, 2nd. ed. revue et augmentée (Paris, 1966), t. 1, pp. 373—374, 567 ; J. G. van Dillen, *Van Rijkdom en Regenten*, hfs. 2. 従来，16世紀末に地中海進出の先鞭をつけたのは，カージーなどの軽量毛織物を武器とするイギリスであったが，17世紀に入って穀物を売込むオランダがこれを凌いで行った。なお，ロシア（アルハンゲルスク）貿易では，市況に応じて穀物の輸出ないし輸入が見られた。

5) Maczak, *art. cit.*, p. 91. 西プロイセン（ポーランド領プロイセン）は，旧ドイツ騎士団領で，大所領が優勢であった。この地方は，全穀物生産の52%に及ぶ剰余を有したが，ポーランド内陸部は不足勝ちで，差引でポーランドの総生産の12%が輸出に向けられた。

6) このズント海峡関税申告に記載された国または都市名は，船長の所属を表わし，必ずしも船籍ではないし，オランダ船が外国人にチャーターされている可能性もありうる。しかし，Bogucka女史が最近，アムステルダムの公証人文書をサンプル抽出によって調査した限りでは（"Amsterdam and the Baltic" p. 435）その90%以上が，オランダ人であった。

7) A. E. Christensen, *Dutch Trade to the Baltic about 1600* (Copenhagen-The Hague, 1941), p. 179 ; J. H. Kernkamp, "Scheepsvaart en handelsbetrekkingen met Italië tijdens de opkomst der Republiek" (1936), *Economisch-Historische Herdrukken*, blz. 204.

8) Van Klaveren, *a.a. O.*, S. 83.

9) Kellenbenz, *Unternehmerkräfte*, passim.

10) B. Hagedorn, *Die Entwicklung der wichtigsten Schiffstypen bis ins 19, Jahrhundert* (Berlin, 1914), S. 104 f ; J. H. Parry, *art. cit.*, 210 ff ; A. M. van der Woude, *a. w.*, blz. 457 e. v. オランダ造船業の発展は，優れた技術と低廉な労働力もさることながら，ノルウェーやドイツの木材を安く輸入しえたことも与っている。オランダ農漁村の海運については拙著Ⅰ，第1章，北ドイツ・デンマークについては，Kellenbenz, "Bäuerliche Unternehmertätigkeit im Bereich der Nord-und Ostsee von Hochmittelalter bis zum Ausgang der neueren Zeit", *S. V. W. G.*, XLIX (1962), 1～40.

11) Kellenbenz, *Unternehmerkäfte*, S. 35 ; Van Klaveren, *a. a. O.*, S. 117.

12) Kellenbenz, "Spanien," S. 322.

13) J. G van Dillen, "De opstand en het Amerikaanse zilver", *Mensen en Achtergronden*, 181—192.

14) Van Dillen, *Van Rijkdom en Regenten*, hfs. 7 ; W. R. Menkman, *De geschiedenis van de West-Indische Compagnie* (Amsterdam, 1947) ; C. R. Boxer, *The Dutch in Brazil 1624—1654* (Oxford, 1957).

15) 上野，前掲書，第6章，参照。

Ⅳ 1) 独立戦争の過程でスペインに帰服した南ネーデルラントも，結局，領邦＝等族国家の構成を18世紀末まで維持して行く。1570年代にフランスのユグノーの諸都市や農村が南フランスで組織し始めた「政治会議」Assemblée Politique は，明らかにオランダの影響を受けた一種の等族議会的共和国を目指している点，興味深いが，この場合にも，貴族の占める地位はオランダに比して遙かに大きかった。ジョルジュ・リヴェ『宗教戦争』(クセジュ文庫)，65頁.

2) 大塚「オランダ型貿易国家の生成」

3) オランダの地主制の展開は，拙著，Ⅰ，第1章，ならびに Jan De Vries, *op. cit.*, passim,

4) W. van Ravesteyn, *Onderzoekingen over de economische en sociale ontwikkeling van Amsterdam gedurende XVIde en het eerste kwart der XVIIde eeuw* (Amsterdam, 1906), blz. 221 ; [Willem Usselincx], *Vertoogh, hoe nootwendich, nut ende profijtelijk het sy voor de Vereenigde Nederlanden te behouden de Vryheyt van te handelen op West-Indien enz.* (1608), p. 15. 上野喬訳『商学論集』第33巻第3号，146—147頁

5) 反宗教改革が，カルヴィニズムに与えた反作用についての興味深い指摘は，H. R. Trevor-Roper, "The Religious Origin of Enlightment", repr. in *Religion, the Reformation and Social Change* (London, 1967), 193—235を参照。

6) 大塚「オランダ型貿易国家の生成」

7) 同「経済史から見た貿易国家の二つの型」なお，大塚久雄氏は，『国民的産業』の意義を，貨幣素材や原料など自給不能な部分を補完する輸出工業として把えているが，『国民的産業』はのみならず，一国経済の，そして，その段階の資本主義の leading sector としての役割を担うものであり，単なる外貨獲得の手段には止らないであろう。(なお，いうまでもなく金銀は，単なる貨幣素材を越える，信用の基礎あるいは，貿易差額という形で実現される蓄積の手段であり，原料一般とは区別されなくてはならない。)同『国民経済』(著作集第6巻90—91頁)

8) 同「産業構造・経済構造・金融構造」(同，『著作集』第9巻)

9) 大塚久雄編『後進資本主義の展開過程』(アジア経済研究所，1974年)

V 1) Faber, "Het Probleem", 3～28. この時点から，ロシアの穀物は輸出されなくなる。

≪図表　典拠及び補足説明≫

1) 第1図　Jan De Vries, *op. cit.*, graph 4・2 facing p. 208 による。(但し農村総人口は，*ibid.* Graph 4・6, facing p. 216 より転写)

2) 第Ⅱ—1表A

オランダ全人口：H. J. Xanten en A. M. van der Woude, "Population changes and economic developments in the Netherlands : a historical survey", *A. A. G. Bijdragen*, 12 (1965), p. 110.

ホラント人口：1514年の戸数調査（拙著，18～19頁表1—1，1—2）ならびに1622年（第Ⅰ—表B）による。都市人口中，1570，1600，1660各年は，前掲，De Vries 推計による。農村人口についても同じ。都市人口は，アムステルダム：J. G. van Dillen, "Omvang en samenstelling van de bevolking van Amsterdam in de 17e en 18e eeuw", herdrukt in *Mensen en Achtergronden* (Groningen, 1964), blz. 484 e. v. ライデン：Posthumus, *Lakenindustrie*, Ⅲ, blz. 882. ハールレム：Xanten en Van der Woude, *art. cit.*, p. 57.

3) 第Ⅱ—1表B，J. G. van Dillen, (ed.), *Bronnen tot de geschiedenis van het bedrijfsleven en het gildwezen van Amsterdam* (R. G. P. no. 69), Inleiding, xxxi.

4) 第Ⅱ—2表A，B，Posthumus, *Lakenindustrie*, Ⅲ, blz. 966, 968.

5) 第Ⅱ—3表A，Posthumus, *Lakenindustrie*, Ⅱ, blz. 129, Ⅲ, blz. 930. 但し，1654年のグレインは記載されていないため，翌年の数字を使用。

6) 第Ⅱ—3表B，Posthumus, *Lakenindustrie*, Ⅲ, blz. 941, Tabel 114 (但し，1619年は，1630年の生産高と単価より筆者が算出，ワルプとラスは，*L. T. N.*, V. blz. 40により，それぞれ反当り30グルデン，27グルデンとした。なお，総計欄は，表の各欄の他，その他の繊維工業生産額を合算している。また1654年度は，

原表の数字の誤植を訂正。

7) 第Ⅱ—4表

1701年：全国総計（船山，前掲書14頁第3表による。）

1640年：**A新毛織物**：ロンドンからの新毛織物・メリアス類輸出＋エクセター・サージ輸出（6.8千反，ただし1638年，単価は1630年のライデンと同じ33.2グルデンとする）。

B　スペイン織：ロンドンからの北欧向輸出（13,517反×£20）

C　旧毛織物：ロンドンのみ，87,427 short cloth，単価，£13 / western short cloth＝£15.16 / short cloth

1619年：新毛織物はロンドンの総輸出（旧毛織物・羊毛・毛皮つき羊毛を除く）×74%（1640年の比率をそのまま適用）（旧毛織物は1618年）

1660年：1701年(a)と，1640年(b)との補間法による。$b+(a-b)\times\frac{1660-1640}{1700-1640}$

1619，40年については，船山前掲書，20～22頁，65，66，74頁，B. E. Supple, *Commercial Crisis and Change in England 1600—1642* (Cambridge, 1959), p. 258；F. J. Fisher, "London's Export Trade in the Early Seventeenth Century", *Economic History Review*, 2nd ser., Ⅲ (1950), repr. W. E. Minchinton, (ed.), *The Growth of English Overseas Trade in the 17th and 18th Centuries* (Lond., 1969), p. 66.〔浅田実訳『16・7世紀の英国経済』102—105頁〕

8) 第Ⅱ—5表，**イギリス**：1660年生産額は，第Ⅱ—4表の輸出の2倍，1700年は，約500万ポンドとする。〔Phyllis Deane, "The Output of the British Woollen Industry", *Journal of Economic History*, XVII, (1957), p. 209〕人口は，Helleiner, *art. cit.*, pp. 32, 67. **オランダ**：1660年，1654年のライデンの生産額×⅝，1700年については，同じくライデンの数字の⅝に，北ブラバントの生産高約1万反×169グルデン。**フランス**：毛織生産高は，T. J. Markovitch, "L'industrie lainiére française au début du XVIIIe siècle", *Revue d' histoire économique et sociale*, XLVI (1968), p. 574 より17世紀中葉と18世紀初頭について，それぞれ1997.8万 livre tournois, 7800万 livre tournois を得た。なお，オランダ・グルデンへの換算率は，1660年については，3 livre tonrnois＝2.5 Gulden とし，1700年は6 livre＝7 gulden とする（cf. N.W. Posthumus, *Inquiry into the History of Prices in Holland*, I (Leiden 1946), pp. 585, 591—595), 人口については，Markovitch も，通説に従って，18世紀初頭を約1900万としている。1660年から1700年にかけては，戦争やユグノー追放による人口減を考慮するとほぼ横這いと考えられる。

9) 第Ⅱ—6表，拙稿「ヴェルヴィエ毛織物工業の展開」（大野・諸田・住谷編『ドイツ資本主義の史的構造』有斐閣，1972年）より作成。

10) 第Ⅲ—1, Maria Bogucka, "Merchants' Profit in Gdansk Foreign Trade," p. 75, Table 1.

11) 第Ⅲ—2表, W. S. Unger, "De Sonttabellen", *Tijdschrift voor Geschiedenis*, XLI (1926), blz. 154.

12) 第Ⅲ—3表, *ibid.* blz. 154.

13) 第Ⅲ—4表, *ibid.* blz. 150.

14) 第Ⅲ—5表, Bogucka, *art. cit.*, p. 76, table 2.

15) 第Ⅲ—6表, *ibid.* p. 89, table 14.

16) 第Ⅲ—7表, Walther Vogel, "Zur Größe der europäischen Handelsflotten im 15., 16. und 17. Jahrhundert : Ein historisch-statistischer Versuch", *Forschungen und Versuche zur Geschichte des Mittelalters und der Neuzeit. Festschrift Dietrich Schäfer* (Jena, 1915), S. 331.

＊《補註》

イングランド＝オランダ間の通貨換算率について。通常二国間の通貨の換算率は，両国通貨の金平価，銀平価，為替レートの三種が考えられる。ところで，為替レートは，両国間の国際収支による変動やユーザンスに見合う利子部分が表現されているので，取扱いが難しい。他方，平価の方も，17世紀には複本位制下，しかも銀の大量流入による金銀比価の激しい変動が見られ，しかも，イギリスは常に金に対する銀の値下りに大陸より遅れを見せている。しかし，これらの問題点を調整した妥当なレートを割出すことは目下史料の関係で困難なので，両国の銀貨の額面価格（計算貨幣による表示）及び銀重量を比較して，1ポンド・スターリング＝11.36グルデンとした。イギリスは，1601年の改鋳により1groat＝4 pence のレートが維持され，1ペニー当り7.18 grain troy，従って，1ポンド・スターリングは110.28グラムの純銀量を表示する。一方オランダでは，法定レートでは1グルデン＝10.7～10.3グラムであったが，良貨の流出と外国通貨の流通で，実勢は9.7グラムであった。そして1659年に，漸く実勢に合せた新平価で改鋳が行われたので，このレートを17世紀全部に適用しても構わぬと思われる。cf. J. C. Riemersma, *Religious Factors in Early Dutch Capitalism. 1550—1650* (The Hague-Paris, 1967), pp. 88, 91.